

東京国立文化財研究所要覧

1986

昭和 61 年度

は　じ　め　に

昭和61年度は、前年度に引続いて継続する研究が多く、とくに特別研究の3件はそれぞれのテーマに沿った独自の研究が続けられた。

一方、この年度から発足したものに、政府開発援助(O. D. A)関係経費として文化庁が要求し、当研究所の特別研究費として認められた「敦煌文化財保存修復に関する調査研究」がある。本件は日中文化交流に関する政府間協議において合意を見たものであるが、日中共同で敦煌文化財の保存方法を考究するため、本年11月第1回訪中団を派遣し、今後の研究の進め方等について意見交換を行ったものである。

また、第10回目を迎えた「文化財の保存及び修復に関する研究のための国際研究集会」は、「アジアにおける仮面の芸能」をテーマとして、韓国、東南アジア諸国等から7人の発表者を迎え、3日間にわたって熱心な討議を展開した。

終りに、本年度末を迎えて、定年退官する研究者などが相次ぎ、永年研究所の中核として活躍された美術部、保存科学部、修復技術部、情報資料部の四部長に加えて、昭和53年以来研究所長としてその発展に尽力された伊藤所長も退職されることになった。研究所にとってかつてない大異動であるが、去られる方がたの御努力に対して心からの敬意と謝意を表するものである。

昭和63年3月

東京国立文化財研究所長

濱　田　隆

目 次

I. 沿 革	1
1. 設 立 の 経 緯	1
2. 年 代 別 重 要 事 項	1
3. 歴 代 所 長	5
II. 機 構 ・ 職 員 ・ 予 算	6
1. 機 構	6
2. 職 員	7
3. 名 誉 研 究 員	9
4. 昭 和 61 年 度 予 算	10
5. 昭 和 61 年 度 科 学 研 究 費 補 助 金 交 付 一 覧	11
III. 調 査 研 究	12
1. 美 術 部	12
(1) 概 要	12
(2) 各 論	13
A. 一 般 研 究	13
B. 特 別 研 究	16
C. 科 学 研 究 費	16
2. 芸 能 部	17
(1) 概 要	17
(2) 各 論	18
A. 一 般 研 究	18
B. 特 別 研 究	20
C. 科 学 研 究 費	20
3. 保 存 科 学 部	21
(1) 概 要	21

(2) 各 論	22
A. 一般研究	22
B. 特別研究	25
C. 受託研究	25
D. 科学研究費	26
4. 修復技術部	27
(1) 概 要	27
(2) 各 論	28
A. 一般研究	28
B. 特別研究	32
C. 受託研究	32
D. 科学研究費	33
E. その他	34
5. 情報資料部	34
(1) 概 要	34
(2) 各 論	35
A. 一般研究	35
B. 科学研究費	36
6. 敦煌文化財保存修復に関する調査研究	37
7. 主要研究業績	38
IV. 事 業	51
1. 出 版	51
(1) 美術研究	51
(2) 日本美術年鑑	52
(3) 保存科学	52
(4) 国際研究集会プロシーディングス	53
2. 黒田清輝巡回展	55
3. 公開学術講座	55

4. 夏期学術講座	56
5. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	57
6. 会 議	59
7. 国際・国内交流	62
(1) 職員の国際交流	62
(2) 海外研究者の来訪	65
(3) 招へい研究員	66
V. 研究施設・設備	69
1. 蔵 書	69
2. 資 料	70
3. 黒田記念室	71
4. 閲 覧 室	71
VI. 関係法規	72

I. 沿 革

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄付・出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顯に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原隼二郎及び東京美術学校校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また、我が国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設備され、東京美術学校校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した(本館)。

同3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また、館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作

沿 革

品を陳列した。

同 4 年 5 月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同 5 年 6 月 28 日 勅令第125号により帝国美術院に 附属美術研究所が 置かれ、東京美術学校正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同 年10月17日 美術研究所開所式を挙行了た。

同 7 年 1 月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。

同 年 4 月 18 日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同 年 5 月 26 日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同 9 年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同 年 4 月 『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。

同 年 6 月 1 日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同 年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平屋建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年 7 ～ 8 月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同 年4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月1日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた。(保存科学部の前身)。昭和23年度より専任の職員を配置し研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室(66㎡)に設けた。

同 24年4月 科学研究費補助金により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日 文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同25年8月29日 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

同26年1月31日 美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。

同27年4月1日 文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

また、文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同 年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫 132 ㎡を改造のうえ移転した。

同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。

同32年3月22日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

沿 革

- 同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71m²が竣工した。
- 同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
- 同36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
- 同37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎(保存科学部実験室)として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663 m²の建物1棟が竣工した。
- 同 年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
- 同 年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
- 同43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
- 同44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎(延1,950.41m²)の起工式が行われた。
- 同45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。
- 同45年4月22日 芸能部は、別館3階に移転した。
- 同45年5月8日 保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終了した。
- 同45年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。
- 同 年11月2日 所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。
(本館は、美術部庁舎となる)したがって研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。
- 同46年4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658 m²を東京国立博物館から所管換された。
- 同48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が

置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

同52年4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

同53年3月20日 本館構内の写場等(木造平家建延面積144㎡)を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積565.95㎡の建物が竣工した。

同53年4月5日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

同59年6月28日 文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。

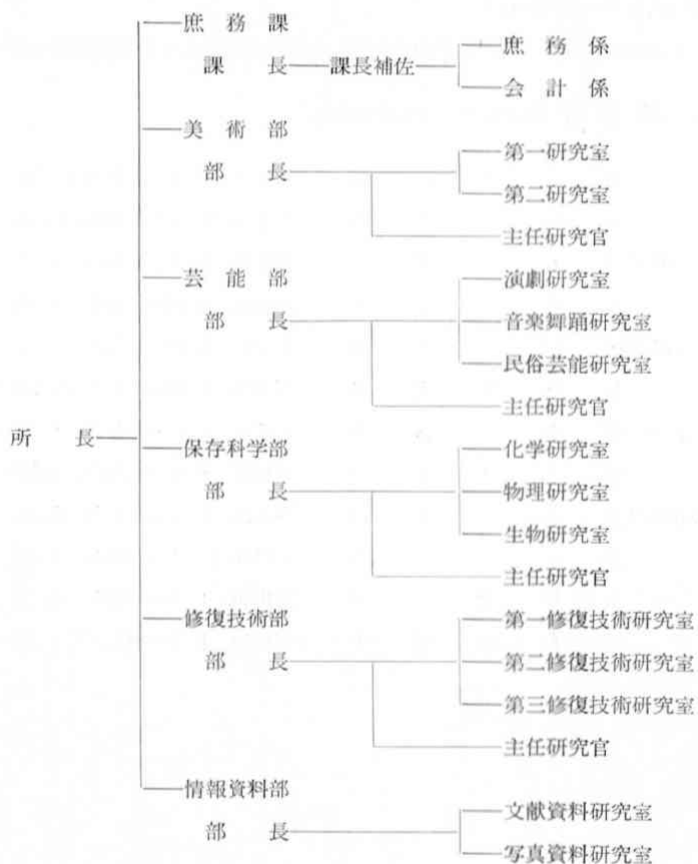
3. 歴代所長(昭和5年～昭和61年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6. 28～昭和 6. 11. 24)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6. 11. 25～昭和10. 5. 31)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6. 21)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6. 22～昭和17. 6. 28)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6. 29～昭和22. 8. 15)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8. 16～昭和23. 5. 10)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5. 11～昭和24. 8. 30)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8. 31～昭和27. 3. 31)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28. 10. 31)
所 長	田 中 一 松	(昭和28. 11. 1～昭和40. 3. 31)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1)
所 長	伊 藤 延 男	(昭和53. 4. 1～現 在)

Ⅱ． 機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1. 機 構



2. 職 員

(昭和62年3月30日現在)

所 属	職 名	氏 名	
所 長	所 長	伊 藤 延 男	(日本建築史)
庶 務 課	課 長	笹 山 保 美	
	課 長 補 佐	西 山 博 朗	
庶 務 係	係 長	斎 藤 多 賀 子	
	庶 務 主 任	松 本 節 子	
	事 務 補 佐 員	中 村 有 喜 子	
	"	太 田 真 由 美	
	"	滝 澤 美 佐 子	
	"	小 野 美 智 子	
	調 査 員(非)	松 原 昇 登	
会 計 係	係 長	相 澤 祥 子	
	係 員	山 下 惠 美	
	事 務 補 佐 員	鎌 田 忠 雄	
	"	山 西 ツセ子	
	技 能 補 佐 員	佐々木 之 内	
	勞 務 補 佐 員	中 山 孝 之	(仏教絵画史)
	"	竹 澤 正 之	(日本仏教絵画史)
美 術 部	部 長	柳 関 口 實 子	(染織工芸史)
第一研究室	室 長	田 三 宅 久 雄	(日本彫刻史)
	主 任 研 究 官	上 野 ア キ	(東洋古代絵画史)
	"	三 輪 英 夫	(日本近世・近代絵画史)
第二研究室	室 長	佐 藤 道 信	(日本近代絵画史)
	研 究 員	山 梨 絵 美 子	(日本近代絵画史)
	"	三 隅 治 雄	(民俗芸能)
芸 能 部	部 長	佐 藤 道 子	(寺院芸能)
演劇研究室	室 長	松 本 雅 都	(中世芸能)
	調 査 研 究 員(非)	広 瀬 美 郷	(日本東洋音楽史)
	"	蒲 生 昭	(音楽学)
音楽舞踊研究室	室 長	高 桑 い ず み	(日本東洋音楽史)
	調 査 研 究 員(非)		

機構・職員・予算

所 属	職 名	氏 名	
民俗芸能研究室	室 長	羽 田 昶	(日本演劇)
保 存 科 学 部	主 任 研 究 官	中 村 茂 子	(民俗芸能)
	調査研究員(非)	仲 井 幸二郎	(芸能史)
	部 長	江 本 義 理	(分析化学)
	室 長	馬 淵 久 夫	(同位体化学)
	主 任 研 究 官	門 倉 武 夫	(無機分析化学)
化 学 研 究 室	研究補佐員(非)	富 澤 威	(分析化学)
	室 長	見 城 敏 子	(塗料化学)
	主 任 研 究 官	石 川 陸 郎	(光学)
物 理 研 究 室	"	三 浦 定 俊	(計測工学)
	室 長	新 井 英 夫	(微生物学)
	調査研究員(非)	森 八 郎	(応用昆虫学)
生 物 研 究 室	部 長	鈴 木 友 也	(日本工芸史)
	室 長	中 里 寿 克	(日本工芸史)
修 復 技 術 部	研 究 員	西 浦 忠 輝	(木材材質改良学)
	専 門 職 員	茂 木 曙	(彩色保存技術)
	室 長	増 田 勝 彦	(日本工芸史)
第二修復技術研究室	室 長	樋 口 清 治	(高分子化学)
第三修復技術研究室	研 究 員	青 木 繁 夫	(考古学)
情 報 資 料 部	部 長	宮 次 男	(日本中世絵画史)
	室 長	米 倉 迪 夫	(日本中世絵画史)
文 献 資 料 研 究 室	研 究 員	島 尾 新	(日本中世絵画史)
	室 長	鶴 田 武 良	(中国絵画史)
	研 究 員	鈴 木 廣 之	(日本近世絵画史)
写 真 資 料 研 究 室	専 門 職 員	橋 本 弘 次	(美術写真)
	"	市 川 和 正	(")
	"	野 久 保 昌 良	(")

昭和61年度における退職者

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶務課	所 長	伊 藤 延 男	53. 4. 1~62. 3.31	退 職
	技 能 補 佐 員	佐々木 忠 雄	59.12. 1~62. 3.30	"
	労 務 補 佐 員	中 山 セツ子	61. 4. 1~61. 8.30	"
美術部	部 長	柳 澤 孝	21. 9.30~62. 3.31	"
保存科学部	部 長	江 本 義 理	27. 4. 1~62. 3.31	"
	調査研究員(非)	森 八 郎	48. 4. 1~62. 3.31	"
修復技術部	部 長	鈴 木 友 也	56. 4.14~62. 3.31	"
情報資料部	"	宮 次 男	30. 9. 1~62. 3.31	"

3. 名誉研究員

氏 名	退 職 時 官 職 名	在 職 期 間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		5. 6.30~27. 8. 1	63.10.18
福 山 敏 男	美 術 部 長	23. 5.11~34. 4.15	"
高 田 修	"	27.12. 1~44. 3.31	"
岩 崎 友 吉	修 復 技 術 部 長	27. 4. 1~49. 5.31	"
登 石 健 三	保 存 科 学 部 長	27.10. 1~50. 4. 1	"
岡 畏三郎	美 術 部 長	20. 5.15~51. 4. 1	"
中 村 傳三郎	美術部第二研究室長	22.10. 1~53. 4. 1	"
関 野 克	所 長	40. 4. 1~53. 4. 1	"
秋 山 光 和	美術部第一研究室長	21.10. 1~42. 2. 1	54.10.18
久 野 健	情 報 資 料 部 長	20. 5.31~57. 4. 1	57.10.18
川 上 涇	美 術 部 長	21. 2.28~57. 4. 1	"
関 千 代	美術部第二研究室長	18.12.15~58. 4. 1	58.10.18
横 道 萬里雄	芸 能 部 長	28. 3.16~51. 4. 1	59.10.18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料 研究室長	17.11. 3~59. 4. 1	"
江 上 綾	情報資料部主任研究 官	38. 5.81~59. 3.31	"
田 村 悦 子	美術部主 任 研 究 官	22. 6.16~60. 3.31	60.10.18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料 研究室長	22. 6.27~60. 3.31	"

4. 昭和61年度予算

()は補正後を表わす。

事 項	千円
人 件 費	282,198
運 営 費	(114,685)
	120,081
事 業 管 理	(33,093)
	35,734
一 般 研 究	(37,460)
	38,311
特 別 研 究	(36,102)
	37,373
壁画・障壁画の科学的研究	1,924
伝統芸能の保存組織のあり方の研究	2,621
金属文化財の材質・技法及び保存に関する科学的研究	3,158
敦煌文化財保存修復に関する調査研究	10,700
研究用機器整備	18,970
受 託 研 究	(1,592)
	1,592
文化財保存に関する国際交流	(6,438)
	6,571
文化財保存修復に関する研究のための国際研究集会	3,372
招へい研究員	2,857
ローマセンター資料収集提供	342
文 部 本 省	
各 所 修 繕	3,552
一 般 修 繕	452
冷暖房設備修繕	3,100
在外研究員旅費	4,977
文 化 庁	
文化財保存事業費	1,500
重文荒神谷遺跡出土銅剣の調査	

5. 昭和61年度科学研究費補助金交付一覧

(1) 職員が研究代表者となったもの

種 別	課 題 名	研究代表者	交 付 額
総合研究(A)	考古遺物の埋蔵環境における変質現象に関する研究(3年次計画第2年次)	江 本 義 理	千円 5,000
"	非破壊的方法による彩色文化財の総合的現地調査方法の確立とその応用に関する研究(3年次計画1第年次)	伊 藤 延 男	8,000
一般研究(B)	東アジア文化圏からみた沖縄舞踊技法の特質とその舞踊譜化の研究(3年次計画第3年次)	三 隅 治 雄	500
一般研究(C)	絵画・書跡などのクリーニング及び補修のための新技術の研究	増 田 勝 彦	1,200
奨励研究(A)	幕末・明治初期日本絵画とアメリカ絵画の相互関係	山 梨 絵 美 子	800
試験研究(1)	彩色文化財の劣化と保存に関する実証的研究(3年次計画第3年次)	鈴 木 友 也	1,000
"	本邦出土古代ガラスの原料産地と材質の変遷(3年次計画第1年次)	馬 淵 久 夫	2,000
試験研究(2)	美術史学における多角的情報処理システムの開発(2年次計画第2年次)	宮 次 男	3,500
計 8 件			

(2) 職員が研究分担者となったもの

別 種	課 題 名	研究代表者名	研究分担者
特別研究(1)	国立博物館、美術館資料に関する情報処理ネットワークシステムの整備に関する調査研究	東京国立博物館 林屋晴三	米 倉 迪 夫
総合研究(A)	保存図書酸性化対策に関する研究	東京農工大学 大江礼三郎	増 田 勝 彦 三 浦 定 俊
"	四十八体仏の彫刻史的保存科学的調査とその基礎研究	東京国立博物館 西川杏太郎	江 本 義 理 馬 淵 久 夫 石 川 陸 郎 三 浦 定 俊
"	醍醐寺の密教法令と建築空間に関する総合的研究	東京大学 稲垣栄三	佐 藤 道 子

Ⅲ. 調査研究

1. 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い、かつその成果を公表することを目的としている。美術部は二室より構成され、古美術は第一研究室が担当し、近代・現代美術は第二研究室の担当である。

研究調査は各時代にわたり絵画・彫刻・工芸の各部門について、作品と文献資料との両面から実証的に進められており、共に基礎となる研究資料の作成と整理とに努めているほか、現代美術の動向に関する調査と資料収集をも平行して行っている。また、作品に関し、早くから実施して来た科学的な鑑識法を積極的に活用しているのも当部の特色である。さらに情報資料部所員とは研究や調査の面で緊密な協力が行われている。昭和59年度からは4か年計画で情報資料部と共同の特別研究「壁画・障壁画の実証的研究」が始まり、調査と関係資料の収集を進めた。そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお、研究員それぞれの研究課題と内容は(2)研究調査活動の項に示すとおりである。

研究調査の結果は、第一研究室全員が編集担当する機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し、また、第二研究室を中心とする『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行しており、単行の研究報告も随時刊行している。さらにそのほか情報資料部との共同で、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために毎年一回公開学術講座を開催している。なお、黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所、現美術部は黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、その多くを陳列する黒田記念室は毎週一回木曜日の午後公開している。

第一研究室

日本及び東洋諸地域の古美術について、各研究員が専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め、主要問題を捉えた共同研究を行い、常に精密な基礎資料の収集に努めている。なお、第一研究室の研究員は『美術研究』の編集業務を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と、これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを継続して行っている。また、科学研究費補助金により「幕末・明治初期日本絵画とアメリカ絵画の相互関係」(奨励研究(A)研究代表者山梨絵美子)の調査研究を行った。とくに現代美術に関する調査研究においては、その年度に収集した資料を整理し、その成果を『日本美術年鑑』として毎年公刊している。本年度は、昭和59年の内容をもった昭和60年版を刊行し、引続いて60年版の編集に着手した。

また、研究事業として昭和52年度以降実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中心となって行っており、本年度は豊橋市美術館で開催した。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 美術基準作品の研究

わが国古代中世の美術工芸品のうち、国宝・重要文化財あるいはそれに準ずる優作で、年記銘を有する作品あるいは作者・流派・様式等を代表するもの等、美術史上の基準的作品について詳細に考察し、併せて文献史料の検討をも加え、美術工芸遺品の体系づけに役立てる。

✓(1) 仏教絵画の調査研究

ア 基準作として有名な教王護国寺藏五大尊(5幅)及び同寺旧藏京都国立博物館藏十二天(12幅)について、それぞれ継続的な調査を実施した。(柳澤・関口)

イ アメリカ合衆国のフリーア美術館、ボストン美術館所蔵の仏画を調査した。

(関口)

✓(2) 日本仏教彫刻史研究

調査研究

前年度に引続き、仏師快慶及び快慶派仏師の研究を行った。今年度は快慶の高弟、行快を対象とし、滋賀阿弥陀寺阿弥陀如来像、京都大報恩寺釈迦如来像など行快作品を調査し、文献史料とあわせて、行快の制作活動、作風上の特色などについて考察した。(三宅)

✓(3) 染織品の研究

ア) 上代裂の研究

東京国立博物館所蔵の法隆寺裂・正倉院裂の基礎調査を続行している。

イ) 近世初期染織品及び小袖の研究

米沢市の上杉神社蔵上杉謙信所用服飾類の調査・研究、宮城県白石市の片倉家伝来服飾類の調査・研究、仙台市博物館新収品の伊達藩土濱田伊豆、同菅野家伝来の服飾類の調査・研究、和歌山市の紀州東照宮伝来服飾類の調査・研究、日光山輪王寺伝来の胴着三領の調査研究を行った。

ウ) 沖縄の伝統染織技術の現状と遺品資料の調査・研究

沖縄本島・宮古群島・八重山群島の島々に残る古来からの染織技術の実態調査に出向いた(今回で4回目)。

エ) アイヌ染織品の調査・研究

室町時代以降のわが国染織品に関連が多く、また原始的要素が濃厚に残存するアイヌ染織品について、昭和60年度に引続き調査・研究を続行している。

オ) 東京芸術大学美術学部中野政樹代表者の科学研究費(昭和58・59・60年度)の「日本工芸基礎資料集成とその技術に関する研究」の分担者としての研究(染織品の基礎資料調査)を続行、そのまとめの段階にかかろうとしている。

✓2. 科学的方法による材質と技法の研究

X線透過法、赤外線写真、紫外線蛍光法、双眼実体顕微鏡、赤外線テレビ等を用いた科学的方法により、わが国美術工芸品の材質・技法・構造などを明らかにする。

(1) 古代中世絵画の材質技法に関する研究

ア 真言八祖行状図の調査研究

汚損や補修の著しい行状図8幅について、前年度に引続き科学的方法を採用して調査を実施し、一部の考察を発表した。(柳澤)

イ 鶴林寺太子堂壁画と四天柱絵の調査研究

太子堂は仏後壁表裏並びに四天柱絵が著しく黒化し、図様が判別し難い。それに対し赤外線テレビカメラによる大掛りな共同調査を実施し、成果を取めた。

(柳澤)

✓(2) 仏像彫刻の材質技法に関する研究

東京国立博物館が実施している法隆寺献納宝物特別総合調査のうち、γ線透視撮影等の方法を用いた四十八体仏の材質・鑄造技法の調査研究に参加した。また、京都清水寺観音・勢至菩薩像、神奈川燈明寺観音・勢至菩薩像、石川尾糸白山社阿弥陀如来像ほかのX線透視撮影を行い木彫像の構造・技法の研究を進めた。(三宅)

(3) 伝統的染織技術の調査・研究

日本工芸会で昭和53年度から続行している東京国立博物館蔵「白地風景模様茶屋染帷子」の復元は、一昨年度で下絵が完成し、昨年度で糸目糊置に入ったが、糸目糊置で、先ず藍に浸染しても防染の役を果たすだけの糊の試作に終始し、この糊作成に失敗すれば、9年間の共同研究が水泡に帰すので、試作実験9回を重ねてこの年は了った。

3. 美術様式とその伝播の研究

わが国美術工芸に見られる様式の展開と系統を、インド・中国・朝鮮や西洋諸地域など諸外国にその源流を探り、その影響と受容の様相を明らかに位置づけると共に、国内における史的展開を体系化する。一方、日本以外の外国各地の美術に関してもそれぞれ様式的検討を行う。

(1) 現存する中国絵画の包括的再検討と国内国外における補足的調査

東京大学東洋文化研究所戸田禎佑教授を代表とする共同研究に参加し、写真資料による検討を加えた。(柳澤・関口)

(2) パーミヤーン壁画の研究

先年に引継ぎ、成城大学調査隊によるパーミヤーン壁画の共同研究に参加し、報告書作成のための作業を続行した。(柳澤)

4. 作家・流派及び美術団体の研究

日本近代作家及びこれに関連する美術家等の伝記資料と作品、作家の属する流派や美術団体の活動などを網羅的かつ体系的に調査して、その実体を明らかにする。

(1) 日本近代美術基礎資料の研究

近代美術に関する未発表の宛書簡研究を継続して行い、林忠正宛書簡の解説及び内

調査研究

容の検討を進めるとともにフランス、イギリス、ドイツでの現地調査を行い(三輪、情報資料部米倉・鈴木)、黒田清輝宛書簡の解説と関連資料の研究を進めた。(三輪・山梨) また、在米日本近代美術品に関する調査研究とその資料作成を行った。(佐藤・山梨)

(2) 日本近代作家研究

ア 近代洋画家研究

黒田清輝、久米桂一郎、原田直次郎、鹿子木孟郎、川村清雄ほか白馬会、太平洋画会系の作家の画歴及び作品の調査研究を行った。(三輪・山梨)

イ 近代日本画家研究

橋本雅邦、柴田是真、狩野芳崖の作品の調査研究を行った。(佐藤)

(3) 昭和初期美術団体に関する研究

昭和初年から戦前に至る美術団体の資料を調査し、その動向、特性を研究した。(佐藤)

B. 特別研究

「壁画・障壁画の実証的研究」(4か年計画の第3年度)

本研究はわが国古代・中世・近世にわたる社寺建造物等の内部を飾る壁画・障壁画を研究対象とする。これらの中には画面の剝落や褪色等の劣化著しいものが少なくなく、よって科学的な鑑識法による詳細な調査を実施し、それぞれの材質や技法及び様式的特色を明らかにすると共に、文献的考察をも加え、それらの美術史的位置づけを行おうとするものである。本年度は先年来実施してきた赤外線テレビカメラによる鶴林寺太子堂四天柱絵の補足調査、西明寺三重塔壁画、三溪園臨春閣障壁画の調査を行った。

C. 科学研究費

「幕末・明治初期日本絵画とアメリカ絵画の相互関係」(奨励研究(A) 研究代表者 山梨絵美子)

日本近代美術と他国の美術の相互関係に関する研究は、従来、ヨーロッパを中心として行われ、アメリカは看過される傾向にあった。本研究は19世紀後半における日本

美術に見られるアメリカ美術からの影響を指摘、幕末・近代日本美術史の新たな一側面を明らかにしようとする目的で、以下のことを行った。

- (1) 19世紀後半にアメリカで広く流布したカーリー・アンド・アイヴス版画関係の資料収集

- (2) 前記資料と明治初期の洋風版画、特に小林清親の作品との比較・考察

本研究の成果は、「小林清親『高輪牛町躰月景』をめぐって」と題して本研究所美術部・情報資料部研究会での発表をもとにさらに検討し、同題で『美術研究』338号に発表した。

2. 芸能部

(1) 概要

芸能部は、日本の伝統芸能に資するために必要な基礎的研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室より構成されている。芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集、整備及び記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。また、研究の結果は刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

本年度は、部をあげて行っている特別研究「伝統芸能の保存組織のあり方の研究」の第3年次として、能・歌舞伎・文楽等における伝承者組織とそれをささえる保存組織のありようを調査・研究した。また、科学研究費補助金による研究としては「東アジア文化圏からみた沖縄舞踊技法の特質とその舞踊譜化の研究(一般研究(B) 研究代表者 三隅治雄)」を行い、「醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合的研究」(総合研究(A) 研究代表者 東京大学教授 稲垣栄三)には、佐藤道子が研究分担者として参加した。

演劇研究室

演劇研究室は、日本古典演劇について芸能学的に調査・研究を行い、また、これら諸芸能の周辺にあって、伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究

調 査 研 究

を進めている。

本年度は、個人研究・共同研究ともに昨年度に引続いて「寺院行事の研究」に重点を置き、特に過去20年にわたって調査・記録を行った録音資料に基づいて、諸宗派の論義法要諸形式の比較分析を行い、これと並行して前記資料の永久保存のためのP. C. M. ダビングの作業を行った。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について、芸能学的、音楽学的な調査研究を行い、これら伝統芸能の成立に深い関係を持つ周辺分野についても、調査研究を進めている。

本年度は、個人研究として「邦楽用語の研究」「楽器の音楽図像学的研究」「能管の唱歌の研究」を行った。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし、それらの保存・活用に資するために必要な研究を行っている。本年度は個人研究として「民俗芸能における採り物の研究」を行い、共同研究として「民俗芸能の民俗的基盤の研究」、「民俗芸能伝承方法の研究」、「民謡の研究」「能の囃子事の研究」を行った。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 寺院行事の研究 一 論義会を中心に

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる総合的比較研究を行い、その変遷・分化をあとづけることを一貫した目的とする。本年度は、昨年度に引続き過去20年間の録音収集資料をもとにして、華嚴・法相・天台・真言諸宗派の論義法要の構成形式を比較分析し、論義法要の諸形式の展開を追求することを試みた。また、この研究課題に関わる各宗派の法会の実地調査も実施しているが、本年度は法隆寺の慈恩会(聖徳宗)、延暦寺の別請堅義会(天台宗)の調査・録音・撮影を行った。(佐藤・廣瀬)

2. 邦楽用語の研究

邦楽の用語は、分野ごとにまちまちな使われ方をしている。本研究は、それらを総合的に把握・整理して、同語異義、異語同義などの様相を明らかにし、新しい用語体系の確立に資することを目的とする。本年度において収集と辞解にいちおうの完結をみた。(蒲生)

3. 楽器の音楽図像学的研究

日本の美術作品には、多くの音楽場面が描かれており、それらは音楽史研究上、重要な資料となりうるものである。本年度は、昨年度に引きつづき三味線を取りあげ詳細な研究を行ったほか、語り物琵琶の図像の収集を行った。(蒲生)

4. 能管の唱歌の研究

能管の唱歌の比較、分析を行い、廃絶した平岩流の芸系を明らかにした。(高桑)

5. 民俗芸能における採り物の研究

ささら(簾・編木)を用いる芸能を調査し、その呪術的性格を明らかにし、楽器であるか採り物であるかなどについて分析、研究した。(中村)

6. 能の囃子事の研究

能の現行曲に用いられる出入事(登退場の音楽)^{でいりごと}と動事(舞踊的演技とその音楽)^{うごきごと}について、各役各流派の譜本および奏演の実際に基づくデータを収集・整理し、それらの概要・形態・用法等进行分析し、客観的・体系的に解明すべく調査研究を進めている。(蒲生・羽田)

7. 民俗芸能の民俗的基盤の研究

芸能を、その行われる季節・場所・参加者(演者・観客を含む)などの面から取り上げる連続した研究の一環として、本年度は「座敷の芸能」に関する調査研究を行った。(三隅・仲井)

8. 民俗芸能伝承方法の研究

各種民俗芸能の伝承方法について資料の収集・分析を行った。(三隅・中村)

9. 民謡の研究

日本の民謡の研究において、民謡の芸謡的要素を無視してはその全き姿をとらえることができないという観点に立ち、古代から近世に至る民謡伝承の上に占める芸謡の位置を究明する目的をもって、前年度に引続き近世歌謡の分析を行い、あわせて童歌、

調査研究

特に遊戯歌の芸術的要素についての調査研究を行った。(三隅・仲井・中村)

B. 特別研究

「伝統芸能の保存組織のあり方の研究」(4か年計画の第3年次)

人から人への技芸の伝達によって保存が可能になる伝統芸能にあつては、その伝達を正確、かつ強固に行わしめる保存伝承組織の確立が望まれる。そのため、過去の伝承組織の諸相を考察し、また、現に各地にある保存会・養成会・愛好会等の実態を調査し、それらの分析を通して、伝統芸能の文化財としてのより完璧な保存組織のあり方を研究する。本年度は、能や歌舞伎、文楽などにおける伝承組織の実態調査を行った。

C. 科学研究費

1. 「東アジア文化圏からみた沖縄舞踊技法の特質とその舞踊譜化の研究」(一般研究(B) 研究代表者 三隅治雄 研究分担者 宜保栄治郎)

わが国の伝統芸能の一翼を占める沖縄の舞踊は、その歴史的、地理的状況から、周辺の中国大陸・東南アジア・太平洋諸島群との交流を深めて、独特の様式・技法を確立するに至った。本研究ではそうした沖縄舞踊の技法を、周辺諸国の舞踊と比較しながら分析を行い、その汎アジア的特質を解明するとともに、その技法の舞踊譜化を実現させようとするものであるが、本年度においては、3か年継続の最終年度とあって、若干の補充調査を行い、その後、いままでの調査資料を整理し、比較研究を行った。

2. 「醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合的研究」(総合研究(A) 研究代表者 東京大学教授 稲垣栄三)

醍醐寺における密教建築と密教法会との関係を復元的に考察することを目的とし、醍醐寺の密教法会の歴史的実態、それを支えた寺内構造、法会の構成等を追求する。その研究分担者として、本年度は醍醐寺所蔵史料の現地調査並びに写真撮影を行った。(佐藤)

3. 保存科学部

(1) 概 要

文化財の材質・構造に関する科学的研究並びに文化財のおかれている保存環境の自然科学的研究を行い、これらを基礎として文化財の保存に関する技術的研究を行っている。研究成果は文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。また、文化財の産地推定の研究も手掛けている。

研究組織は、化学研究室、物理研究室、生物研究室の3室から成っている。調査研究の結果は、修復技術部と共同の機関誌「保存科学」により公表される。

受託研究は修復技術部と共同の「国宝、重文、日光社寺建造物に関する研究」を行った。

科学研究費「彩色文化財の劣化と保存に関する実証的研究」(試験研究(1))は、修復技術部と共同で各担当者が分担課題について調査研究を行った。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む)並びにその結果の公表を職務としている。

内容としては、微量分析、非破壊分析、同位体分析によって、主として無機物質の材質とその劣化に関する研究、原料産地に関する研究を行っている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表を職務としている。具体的には、文化財の材質・構造を知るため、 γ 線・X線・紫外線・赤外線などを用いた非接触的な手法を開発し応用する研究を行っている。

また、展示・収蔵・梱包輸送などの保存環境に関し、温湿度・照明・アルカリ汚染因子などが文化財に及ぼす劣化現象を把握し、劣化防止並びにその応用に関する研究を行っている。

調査研究

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究とその公表を職務としている。文化財の生物(微生物、昆虫等)による被害の実態調査、生物劣化要因並びに劣化機構の調査研究、加害生物防除法の研究並びに開発を行い、これを実施している。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 文化財の材質・構造に関する研究

(1) 重文荒神谷遺跡出土銅剣の調査

ア 鉛同位体比

昨年度に引続き、今年度は既に約200本について測定を終え、なお、測定を続けている。鉛の産地は大部分が華北産で、朝鮮半島産が若干あり、日本産は皆無である。

イ 元素組成

数本の蛍光X線分析及び錆のI.C.P分析から銅、スズ、鉛を主成分とする青銅製であることは確実であるが、正確な元素組成は不明である。

ウ X線透視写真

約140本について行い、劣化状態の識別に役立つ透視写真を得ている。

(2) 彩色文化財の保存に関する研究

ア エミシオグラフィの利用

当研究所で保管する明治時代の絵馬のエミシオグラフィを撮影し、X線分析や赤外テレビなどによる調査結果と比較検討した結果、伝統的な日本画顔料と油彩画顔料とが混在して用いられていることがわかった。

イ 油絵の劣化現象の研究

日本独特の油絵の劣化現象を究明するために、約10年間、種々の環境に放置してあった基礎的試料について、電子顕微鏡、赤外吸収スペクトル、表面分析を行って、劣化の原因が一部明らかになった。

ウ 古代赤色顔料の研究

八幡山古墳出土漆棺、向北原古墳の赤色顔料のベンガラを電子顕微鏡でみる

と、中空円筒状凝集粒子構造を示し、現在のベンガラの単なる粒子像とは異なる。密閉飽和水蒸気雰囲気中に鉄板を2年間放置して生じた錆の電子顕微鏡像が中空円筒状凝集粒子構造を有することが観察され、古代ベンガラとの関連を研究中である。

エ 油彩画表面の結晶性生成物に関する研究

結晶性生成物を非破壊X線回折装置で測定するとともに、剝落した結晶をイオンクロマトグラフィーで分析して結晶の生成要因について検討している。

2. 保存及び展示環境等に関する研究

(1) 施設内環境調査

博物館・美術館等の展示室・収蔵庫の温湿度、照明等の環境測定、新設施設のシーリングの検討を行い、保存・展示環境の適否に関し調査を行っている。

福島：福島県立博物館	千葉：館山市立博物館
福島：郡山市民文化センター	東京：足立区立郷土博物館
東京：府中市郷土の森博物館	栃木：県立しもつけ風土記の丘資料館
栃木：佐野市立郷土博物館	石川：石川県立歴史博物館
香川：金刀比羅宮博物館	滋賀：滋賀県立近代美術館

(2) 屋内汚染因子の除去対策

新たに建造された博物館・美術館の屋内汚染因子を除去する対策として、吸着剤による除去対策の研究を行っている。

(3) 展示室における日照の影響調査

二条城、庭園美術館、根津美術館の展示室を一年間、光モニターを使って調査し、対策を検討している。

(4) 博物館・美術館における二酸化窒素の測定

大気中の二酸化窒素が文化財の保存、展示環境においてどのような挙動を示すかを把握するため、博物館、美術館の展示室、展示ケース、収蔵庫内で二酸化窒素を測定している。

3. 生物劣化とその防除

(1) 紙質類文化財の保存に関する研究

ア ホキシングの要因には種々の説があるので、3種類の異なる要因(カビ、鉄、

調査研究

樹脂)のホキシングについて、走査電子顕微鏡による比較検討を行った。

- イ 美術工芸品には、乾燥状態に好んで生育するカビが繁殖して被害を与える。軸装、収蔵庫から分離したカビから新種が発見されたので、その分類学的研究を行った。
- ウ 酸性紙の中和：ジエチル亜鉛による上質紙の中和処理条件を検討し、確実に中和し得る処理条件を決定した。
- エ ホキシング形成機構を明らかにするために、ホキシング要因糸状菌の代謝生成物並びにホキシングの分析を行い、有機酸、アミノ酸等の分析を行った。

(2) 生物学的調査

- ア 中尊寺金色堂の保存状態調査：覆堂内の金色堂壁面に発生したカビの調査から覆堂内環境が推定されるので、保存環境の設定の湿度上限を助言した。
- イ 楽器の生物被害調査：三味線、笛(インド)、絃楽器(パキスタン)等に発生した生物被害を調査し対策を助言した。
- ウ アル・タール遺跡出土の遺物調査：保存中の絨緞に発生したカビについて調査し今後の対策を検討した。
- エ 国立歴史民俗博物館の展示施設における生物被害の対策を検討した。
- オ 中華民国国立故宮博物院における文化財の生物被害調査等を行った。
- カ 中華民国台南市における建造物、図書館等の文化財の生物被害調査を行った。
- キ ネフェルタリ王妃墓の壁画保存の総合調査に参加し、生物学的調査を実施した。

(3) 生物被害防除の実施

- ア 奈良薬師堂の木彫の害虫処理を行った。
- イ 高松塚の微生物調査を実施している。

4. その他

(1) 古代漆断片試料の研究

電子顕微鏡により、法隆寺宝物漆皮箱、埴鉢の断片ほか8種の試料の下地固めの構造、布の劣化状況を解析した。

(2) 石造文化財の凍結破壊に関する研究

覆屋の断熱処置による凍結破壊防止対策の効果について、福島県小高町の薬師堂磨崖仏をフィールドとして調査を行っている。この冬の観察によれば屋根、壁、床下の断熱、隙間を塞ぐなどの工事(昭和61年度国庫補助事業)により、覆屋内部の気温は約3度上がり凍結が防止された。

B. 特別研究

金属文化財の材質技法及び保存に関する科学研究(4か年計画の第2年次)

金属文化財について、保存・修復技術の向上に資するため、最新の科学的方法により時代による材質や製作技法の変遷、劣化状況の調査を行った。

1. プラズマ発光分光分析

I.C.Pはテスト段階から実用の段階に入り、銅鐸などの定量分析を行った。青銅の場合、主成分の銅、スズ、鉛のほか、アルミニウム、カルシウム、クロム、鉄、ニッケル、亜鉛、ヒ素、アンチモン、銀、金、ビスマスなどの微量元素(含有量0.01~1%)が測定された。一つの銅鐸の劣化の程度の異なる部分を定量した結果、劣化が進むとスズ、鉛が本体部分に濃縮することがわかった。

2. X線分析

回折によってブロンズ病の判定可能

3. 鉛同位体比測定

栃木県、群馬県、千葉県、静岡県、長野県から近年出土した銅鐸、銅剣、銅鏃、小銅鐸、馬鐸など約50資料を測定した。また、純銅に近い組成をもつ銅造仏や金銅仏も多くの場合測定可能なことがわかった。

4. ガンマー線透視撮影

金銅仏約10資料の構造調査を行った。

C. 受託研究

1. 中尊寺金色堂の保存環境の調査研究

金色堂保存施設の改修工事に先立ち、金色堂内外の温湿度環境を調査した(現在も継続中)。自然のままでは80%RH近い高湿度で黴が生えること、高湿度の原因は床下からの湿気と、ガラスの隙間からの湿気の進入であることなどを明らかにした。調

調査研究

査結果を受けた国宝金色堂保存施設調査委員会の指導により、保存施設の改修計画が決定された。(昭和61～63年度国庫補助事業)

2. 中尊寺金色堂等の生物学的調査研究

中尊寺金色堂の覆屋は、昭和62年度に改修が予定されている。現在、空調は積極的に行っていない。金色堂の壁面に白色粉状のカビが発生していることが判明したので、これらのカビの生理的性質を調査して、カビの発生を防止する保存環境条件の上限を求める調査研究を行う。その他讃衡堂等の保存展示品についても生物学的調査を行う。本年度は、金色堂壁面、一字金輪仏、八角須弥壇からカビの試料を採集・分離して、生理的性質を実験中である。

3. 国宝・重要文化財日光社寺建造物の保存に関する研究

日光社寺建造物の保存修理事業は、本年度から新段階に入ったので、従来と視点を変えて実施することになった。すなわち、同じ大猷院の建造物であるが、保存状態の良好な夜叉門と著しい劣化現象を示す二天門との保存に関し、次の項目について比較研究を行う。(1)漆塗膜劣化状態、(2)漆塗装技法、(3)生物学的環境条件等である。本年度は、現地で夜叉門の保存状態の調査を実施した。

4. 鉛同位体比測定による新豊陀山D-2号墳出土青銅製品の原料産地推定

小形青銅鏡1面、三角縁神獸鏡1面、銅鏃10点の鉛同位体比を測定し、これらのすべてが華南産の鉛を含むことを確かめた。

D. 科学研究費

1. 「考古遺物の埋蔵環境における変質現象に関する研究」(総合研究(A) 研究代表者 江本義理, 研究協力者 一国雅巳, 池本 勲, 竹田満州雄, 藤原棋多夫, 門倉武夫, 町田 章)

海底の埋蔵環境を北海道江差の開陽丸遺物について研究した。また、鉄器さび層内の銅の存在、青銅製品の埋蔵環境内での成分元素の移動についても分析化学的研究を行った。

2. 「非破壊の方法による彩色文化財の総合的現地調査方法の確立とその応用に関する研究」(総合研究(A) 研究代表者 伊藤延男, 研究協力者 江本義理, 門倉武夫, 馬淵久夫, 三浦定俊等)

既存の蛍光X線分析装置およびX線回折装置にリフターを付けて可搬式に改良し、横浜の三溪園内に存在する重要文化財天瑞寺寺堂覆堂内の彩色顔料を非破壊的に定性分析した。

3. 「本邦出土古代ガラスの原料産地と材質の変遷」(試験研究(1) 研究代表者 馬淵久夫, 研究協力者 久保哲三, 平尾良光, 三浦定俊, 永嶋正春, 青木繁夫)
弥生時代, 古墳時代, 奈良平安時代のガラス試料を約 250 点収集し, 蛍光X線法と放射化分析法で成分を分析した。

4. 修復技術部

(1) 概 要

修復技術部は, 文化財の修復に関する科学的調査研究とその公表を主務とする部で, 老化破損した文化財を修復する方法を科学的に調査研究している。

研究対象としては, 絵画, 彫刻, 工芸品, 書跡, 考古資料, 建造物及び民俗資料等極めて広範囲の文化財があげられる。

研究組織としては, 3 研究室, 6 研究員, 1 専門職員からなっている。

第一修復技術研究室

木材及び漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的, 技術的研究とその結果の公表を主務とする。

第二修復技術研究室

紙, 繊維又は皮革を主材料とする文化財の修復に関する科学的, 技術的研究とその結果の公表を主務とする。

第三修復技術研究室

金属, 石, 土又はその他の無機材質の文化財の修復に関する科学的, 技術的研究とその結果の公表を主務とする。

各研究室とも経常的な研究として, 有形文化財を構成している材料, 構造, 製作技法についての研究や, それらを修復するための伝統技術の整理体系化と科学的裏付の資料集積, そして科学的な材料, 技法の修復への応用と開発のための実証的な研究などを実施しており, 特に材質強化, 補強, 接合, 剝落防止, 朽損部充填などについて

調査研究

各種合成樹脂の応用と修復技法の開発に努めている。

これらの研究過程においては、保存科学との共同研究が必要な部分もあり、また、部内においても一つの文化財が二つ以上の研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く、それらについては各研究室員による共同作業によって研究が進められている。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 伝統的製作技法及び修復技術の研究

(1) 金工品の研究

関東地区に所在する鎌倉時代の鏡の様式・製作技法について調査した。また、仙台市瑞鳳殿出土煙管の復元研究を行った。(鈴木)

(2) 漆芸品の研究

中島淑枝氏が行った東京国立博物館の輪花形合子の修復に際し、技法の調査を行った。さらにサントリー美術館所蔵の南蛮蒔絵タンス、螺鈿大盆、大和文華館所蔵の堆黒ぐり盆についてX線透視撮影等の調査を行った。(中里)

(3) 装潢技法・和紙製造技術の研究

昨年、日本郵船小樽支店壁紙復元について技術的援助を行ったが、本年度も引き続き復元のための試験製作を実施した。(増田)

2. 彩色文化財の保存修復研究

顔料彩色剝落止用の接着剤を改良するため、膠水とトルエンのエマルジョンを試作し、その性能を検討した。トルエン中に濃厚な膠水を強力に攪拌しながら分散させるとエマルジョンが得られる。この液は接着速度が早く、しかも乾燥後に膠層がスポンジ状の多孔質なものになるため膠の内部応力を緩和させることができると思われ、そのために硬い厚彩色層の再接着に適していると考えられる。従来使用している膠の濃度と比較して樹脂光沢はかなり軽減される。しかし、膠層が白化することや接着性能の測定が困難なため、今後とも基礎実験を続けることが必要である。

高尾山薬王院不動明王他3件の木彫彩色像(江戸末期)の彩色剝落止処置を実験施工した。これは厚く硬い顔料彩色が本地から反り返えるように層状に剝離しているもの

で、従来から使用している剝落止用合成樹脂では再接着が困難なものである。これに対し今回は柔軟性と粘着力に富んだメタクリル酸ブチルとアクリル酸メチルの共重合体(商品名アクリラック)の濃厚溶液(30—40%)を注入して再接着した。この樹脂は溶液重合によって製造され、比較的分子量が低いので溶剤に溶けやすい。そのため接着面からはみ出した樹脂は簡単に除去することが可能である。顔料層が剝落して木地が露出している部分については、市販品モデリングペースト(アクリルエマルジョンと大理石粉末の混合物)で下地を塗り、乾燥後表面を磨いて平滑にした上にアクリル絵具で簡単な補彩を施した。

重要文化財旧福岡県公会堂貴賓館天井絵(油絵)を塗りつぶしたペンキの除去作業を指導した。昨年度末の試験的調査に基づき、塩化メチレン系の市販塗料剝離剤を用いて、油絵を損傷させずにペンキを完全に剝がすことができた。ペンキ除去後の画面には黄褐色の自然の汚れが付着しており、これは重炭酸アンモニアの5%水溶液で洗浄したが、完全に汚れを落とすまでにいたらなかった。(樋口)

3. 木造文化財の保存修復研究

国宝「如庵」の虫害で損傷した袖壁の柱を修復するための樹脂処置に協力した。従来のエポキシ系人工木材による修復では将来変色の恐れもあり、また、充填部分からはみ出した樹脂がオリジナル部分を汚損した場合それを除くことは困難であった。そこで今回は、柱芯の修復には従来のエポキシ樹脂系人工木材を用い、表面の部分には樹脂含浸木粉(商品名ブレンフィラー)とアクリル樹脂(商品名パロロイドB72)の30—40%トルエン溶液を混合したものを充填した。これは乾燥後も溶剤で容易に除去できるので、オリジナル表面を汚損させる心配はない。また、アクリル樹脂はエポキシ樹脂のように紫外線による顕著な変色も避けられると考えられる。(樋口)

4. 紙製文化財の保存修復研究

絵画・書跡などのクリーニング及び補修のため、空気、水、溶剤等をスクリーンを通じて吸引するテーブルと、超音波振動子、手漉紙用漉枠との組み合わせで、紙、布の洗浄、紙本欠失部の補修、絹本上の墨の局部脱墨などの処置を行う装置を開発した。欠失部補修(漉嵌め)については、招へい研究員ベル・ラーセン氏と共同実験した結果、通常の大きさの古文書を取り扱うには、比較的小型のポンプで十分な効果が得られる方法を開発した。(増田)

調査研究

5. 金属文化財の保存修復研究

鉄製品は、昨年に引き続きアリカリン・サルファイト法を酒田市出土蕨手刀に対して実施実験した。前回の実験ではこの処理後一部の遺物で色が黒く変化するなどの支障があった。これは錆の大部分を占める3価に酸化されている鉄(ヘマタイトあるいはオキシ水酸化鉄など)がマグネタイトに変化するためと考えられる。鉄製品の錆の分析を行い、腐食状態の違いによって起こる色の変化を正確に把握するために、今後も実験を続ける必要がある。

可溶性塩類を窒素ガスを満たしたソックスレー中で脱塩する方法については、基礎実験が終わり、袋井市愛野向山遺跡出土遺物などに実施した。その抽出液中の塩素をイオン・クロマトグラフィーで定量分析した結果、従来の水酸化ナトリウム法などに比べ確実に脱塩処理ができることが判明し、また、処理時間も短くなった。

シランカップリング剤を使用して、鉄製品を強化するために減圧含浸するアクリル樹脂と錆の接着を改良する実験を開始した。シランカップリング剤は有機層と無機層間の接着を改善するので、従来から鉄製品の強化に使用しているアクリル樹脂と鉄製品の錆の接着を改良することが期待できる。また、樹脂塗膜の微細な欠陥や樹脂含浸だけでは浸透が期待できない鉄表面の微細な亀裂にもシランカップリング剤が充填され、さらに錆表面を疎水化して水を排除する可能性がある。そのため接着性能の改良とともに腐食防止効果も期待できる。埼玉県深谷市出土鉄製品に対して、ソックスレーを用いた脱塩法とこのシランカップリング剤法を実施実験した。処理後遺物を相対湿度95%の環境に60日間放置したが新しい錆びの発生は見られなかった。

銅製品については、長野県塩尻市弥ノ神古墳出土獣帯鏡、袋井市愛野向山遺跡出土銅製品一括遺物にソックスレー脱塩法とベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理を行った。(樋口・青木)

6. 石造文化財の保存修復研究

史跡北海道小樽市手宮洞窟保存修復調査委員会に参加して、洞窟の風化状態、亀裂状況、合成樹脂注入の可能性等を調査し保存計画の方針を立案した。

重要文化財長野県飯田市永文寺石室の保存修復に際し、エポキシ樹脂(商品名アラルダイトCY230、エポメートB002)による石材の接着、アクリルシリコンオリゴマー(商品名ゼムラック)による擬石処置、シラン含浸強化剤(商品名SS101)による塗

布含浸処置を指導した。

重要文化財旧山形県議会議事堂の修理に伴う事前調査として、石壁、煉瓦壁のクリーニング及び潑水処置、目地材の補修方法について調査した。石壁に生じた塩類の析出、結晶化汚損をモラー氏試薬によって除去を試みたが良い結果は得られず機械的に削り落とすことにした。また、汚損した煉瓦壁面のクリーニングには水洗や重炭酸アンモン水溶液が効果があるが、クリーニング後の煉瓦表面は風化した多孔質な面が露出するため、水を吸収しやすくなり凍害の恐れを生じさせることが判明した。この防止にはシラン樹脂を煉瓦に含浸させ潑水性をもたせることが望ましいが、シラン樹脂の吸収が激しいため経済的な面で検討を要する。(樋口)

重要文化財三重県専修寺如来堂の大型獅子口瓦の保存修復処置について調査を行った。内容は、1)シランの含浸、2)亀裂への樹脂注入、3)割損部の接着、4)欠損部の新瓦接着補填、5)調色、6)銅線縛り補強である。

重要文化財兵庫県山邑邸の建築石材(大谷石)の保存修復処置について調査を行った。外装部の水によるクリーニングとシラン塗付含浸及び内外装部の脆弱崩壊性劣化部の除去、新石材のエポキシ樹脂による貼りつけ補填を行うべきと判断した。

重要文化財大分県宝篋印塔の保存修復処置について調査指導を行った。半解体し取外した部分のうち、方立て石は含浸法、相輪石、笠石は湿布法で、また、取外さなかった部分は注ぎ掛法で、それぞれシラン含浸強化防水処置を行った。相輪、方立て石の割損部及び劣化部除去新材補填部の接着はエポキシ樹脂で行った。

シラン含浸処置に伴う石材の暗色化について、カラーコンピューターを用いた実験研究を行った結果、1)シランの含浸量が多いほど変色が大い、2)変色はほとんど明度の低下(暗色化)で彩度、色相の変化は極めて小さい、3)変色は時間の経過とともに元に戻る、4)色が元に戻ってもシラン処理の効果は持続することが明らかになった。

中国の石窟の保存に用いることを目的とした、珪酸カリウムによる石材の強化、保存処置に関する実験的研究を中国敦煌研究院保護研究所の李最雄氏と共同で行った。その結果 SiO_2/K 20比の大きい(3.8—3.9)珪酸カリウムはかなり有効であり、中国西北部乾燥地域の石窟の保存に応用し得る可能性があるかと判断された。(西浦)

7. 遺跡・遺構の保存修復研究

史跡茨城県勝田市十五郎穴横穴古墳の保存について検討した。現在までの実験で遺

調査研究

跡を埋め戻すことが保存には一番効果があることが分かっている。本年度は横穴内部の環境保持と横穴が掘られた崖の崩壊防止を目的とした実施実験をした。崖の崩壊の主な原因は土中水分の凍結融解である。これを防止するため崖に断熱効果の優れたウレタンフォームを吹きつけ、周囲の崖と調和を取るためその上をゼムラック凝石で覆った。また、横穴入口は同じ樹脂を使用して閉塞石を作り閉鎖した。この閉塞石は必要に応じて取外すことが可能である。この処置によって埋め戻しと同じ効果を得ることができたため横穴内部の環境が改善された。(樋口・青木)

B. 特別研究

金属文化財の材質技法及び保存に関する科学研究(4カ年計画の第2年次, 保存科学部と共同研究)

C. 受託研究

1. 三ヶ日町猪久保遺跡出土銅鐸の保存修復に関する研究(保存科学部と共同研究)

本銅鐸は、突線鈕式の弥生後期末のもので、全体に腐食が著しく表面は粉状で手で触れると錆びが付着する状態であった。また、出土の際ブルドーザーによって下端部が破砕されていた。

分析調査

ブラズマ発光分光分析によりこの銅鐸の材質は、銅95.2%、錫3.2%、鉛4.1%を含むブロンズであることが判明した。また、鉛同位体測定による原料産地推定分析では、華北産鉛を使用していることがわかり、近畿式、三遠式銅鐸の値と完全に一致した。腐食生成物の分析はX線回折法で行い、塩基性炭酸銅が検出されたが塩化銅は発見されなかった。

分析による塩化銅は発見されなかったが、炭酸銅の下に塩化銅が隠れていることがあり、そのためベンゾトリアゾール3%アルコール溶液に浸漬して腐食生成物の安定化処理を行った。折損部分の接合はエポキシ樹脂を用いて行い欠損部分はガラス繊維にエポキシ樹脂をしみ込ませた強化プラスチックで補修した。

D. 科学研究費

1. 「彩色文化財の劣化と保存に関する実証的研究」(試験研究(1) 研究代表者 鈴木友也, 研究分担者 江本義理, 馬淵久夫, 見城敏子, 新井英夫, 石川陸郎, 門倉武夫, 三浦定俊, 中里寿克, 西浦忠輝, 茂木曙, 増田勝彦, 樋口清治, 青木繁夫, 柳沢孝, 三宅久雄, 小西卓也)

本年は3年計画の第3年次に当たり, これまでの研究の総括と報告書の作成を行った。報告書に収録を予定している論文は次のとおりである。

目 次

1) 「総説」鈴木友也

2) 材料

「建造物彩色に用いられる顔料のX線回折法による測定」門倉武夫, 「建築彩色の修理時に使用される顔料の材質調査」江本義理, 「重要文化財神部・浅間・大蔵御視社の彩色手板の変退色試験」石川陸郎, 茂木曙, 「アミノ酸による膠の同定の試み」見城敏子。

3) 調査

「報告, 斜光照明装置」増田勝彦, 「エミシオグラフィーによる絵馬の調査」三浦定俊, 神庭信幸, 「重要文化財妙義神社総門に使用されている彩色顔料の材質調査」江本義理。

4) 修復処置

「彩色木彫像の保存修復処置について」樋口清治, 「彩色木彫像の保存修復に用いた彩色顔料と合成樹脂による色変化」樋口清治, 今津節生, 「重要文化財長谷寺本堂壁画『廿五菩薩来仰図』剝落止め処置法の研究」増田勝彦, 樋口清治, 「顔料彩色層(胡粉, 黄土)の粉状剝落の防止処置について」樋口清治, 岡部昌子, 「薬王院(高尾山)本尊不動明王及び脇侍の彩色保存処置」中里寿克。

5) 現地調査

「重要文化財金地院東照宮内部彩色及び重要文化財知恩院経蔵内部彩色の剝落止め処置の有効性についての調査」樋口清治, 「襖彩色層の剝離の調査」増田勝彦, 「障壁画保存環境調査」江本義理, 石川陸郎, 三浦定俊, 鈴木友也。

6) 資料

「丹塗り塗装の耐久性」樋口清治, 中里寿克, 西浦忠輝。

2. 「絵画・書跡などのクリーニングおよび補修のための新技術の研究」(一般研究(C))

調査研究

研究代表者 増田勝彦)

サクシヨントーブルによる5秒—10秒間の洗浄が、水中浸漬20分間位の洗浄効果と同等であることを確認した。さらに超音波発信機との組み合わせによって、従来最も困難であった塵埃や顔料、墨の洗浄に対して十分な効果があることを確認した。

E. その他

1. 高松塚古墳壁画の保存

国宝・高松塚古墳壁画の保存修復処置について、本年度は特に剝落止処置は行わず報告書作成用の写真撮影を主として行った。微生物学的調査と燻蒸処置は昨年と同様に実施した。(保存科学部と共同)

2. 重要文化財・荒神谷遺跡出土銅剣の調査

銅剣の分析調査にともなうクリーニング及びX線撮影を行った。(保存科学部の項を参照)

5. 情報資料部

(1) 概要

情報資料部は、従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成、収集、整理、保管、閲覧等の業務を充実発展させ、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術研究所創設以来内外の研究者の利用に供され、文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を計るため、昭和60年度より「美術史学における多角的情報処理システムの開発」(試験研究(2))を中心に電算機を利用した情報処理システムの基礎的研究に着手した。

当部研究員は、上記業務を行うと共に日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っているが、今年度は美術部と共同して特別研究「壁画・障壁画の実証的研究」に参加した。調査研究活動の成果は『美術研究』ほか学会誌、美術部と共催の公開学術講座で発表されている。

当部は、文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録を作成しており、各年分は『日本美術年鑑』に掲載し一定期間毎に総合・増補し『日本・東洋古美術文献目録』として刊行している。現在、昭和41年～60年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作制、収集、整理、保管、閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し資料の充実につとめた。また、これに平行して美術研究所当時に撮影したガラス製写真原板の転写を昨年度に引続き実施した。

(2) 各 論

A. 一般研究

1. 美術資料に関する情報処理システムの基礎的研究

学術情報の著しい増加と、需要の多様化傾向に対応すべく美術史研究資料を中心とした情報処理システムの研究を美術部と協同で行った。

本年は主として文献データベース作成のためのモデル開発を行った(科研項目参照)。また、科学研究費補助金(特定研究(1))「国立の博物館・美術館資料に関する情報処理ネットワークシステムの整備に関する調査研究」(研究代表者 林屋晴三)に参加した。(米倉、鈴木、島尾)

2. 日本古代中世美術の研究

(1) 絵巻物の研究

昨年にひきつづき八幡縁起の調査研究(宮)、法然上人伝絵の調査研究(米倉)を進め、その成果を『美術研究』に発表した。

(2) 中世水墨画の研究

人麿像の調査研究を行うとともに、南北朝・室町絵画の画蹟資料の整理・研究を進

調査研究

めた。(島尾)

3 近世美術史の研究

「江戸時代における博物誌と絵画の関係についての研究」というテーマのもとに、ヨ
ンストン『動物図譜』をはじめとする資料の調査を行い、その成果を『美術研究』誌上に
発表した。(鈴木)

昨年に引きつづき横浜三溪園内の臨春閣及び月華殿障壁画に関する研究を行い、新
知見を含む調査結果を『三溪園臨春閣及び月華殿障壁画調査報告書』にまとめ、あわせ
て臨春閣障壁画に関する諸問題を『美術研究』誌上で考察した。(鈴木)

大和文華館主催の狩野山雪展シンポジウム(61. 11)に参加した。(鈴木)

美術部「林忠正宛書簡の研究」に参加し、林忠正より購入された近世を中心とす美術
品に関する海外調査を行った。(米倉・鈴木)

4. 中国絵画研究

今年度から富岡鉄斎手録の来舶画人及中国絵画関係事項の調査を始めた。

香港中文大学における中国当代絵画シンポジウムに参加して現代中国絵画の動向を
調査し、合せて同大学嶺南派研究セミナーに出席して発表を行い、同大学文物館收藏
高剣父その他嶺南派作品の調査を行った。また、台湾・台北市及び台南市において台
湾近代絵画の発展、動向について調査を行い、中国、北京・中央美術学院において民
国期展覧会及び画社関係資料の調査を行った。(鶴田)

B. 科学研究費

「美術史学における多角的情報処理システムの開発」(試験研究(2) 研究代表者 宮

次男：研究分担者 柳澤 孝、田実栄子、三宅久雄、関口正之、三輪英夫、佐藤
道信、山梨絵美子、米倉迪夫、島尾 新、鶴田武良、鈴木廣之)

本研究は美術史における学術的データベースの構築に関わる諸条件の調査、目標と
すべきシステム像の探求を通じて、電算機を用いた日本東洋美術史における多角的情
報処理システム作成のための基礎的研究を行うことを目的とする。

上記目的の下に前年度において検討した美術史における各種データフィールドの特
性、並びに設定された課題である文献データベースの構築実験(戦後刊行の美術全集所
載美術史文献データベースの構築)に基づき、今年度はデータ構造が前年度のモデルと

類似するものの、その構造の複雑な学術雑誌所載文献データベースの構築とキーワードの抽出、検索プログラムを伴ったデータベースモデルを作成した。

(1) 雑誌所載美術史文献データベース 当該データベースの構成は雑誌典拠ファイル、雑誌台帳ファイル、文献ファイル、キーワード文献対応テーブル、キーワードファイルから成る。文献データは6,000件の入力を終えたが、これには文献書誌のほか文献分類・ジャンル・地域・国・時代コードが付されている。

(2) キーワード 上記文献データの内容に即したキーワードの収集も同時に行った。このキーワード群は美術史データベースにおける各データフィールドへの多角的なアプローチを可能にする検索語群として管理すべく分類・属性の決定を行った。

(3) データベースモデルの作成 上記データの中から「国華」所載文献(昭和41—60年)をサンプルとして文献書誌データ・分類コード・キーワードよりなるデータベースモデルを作成し、検索プログラムをこれに付した。

(4) 昭和60・61年の二次にわたる当研究の成果を「研究成果報告書」としてまとめた。

6. 敦煌文化財保存修復に関する調査研究

人類の貴重な文化遺産として国際的に高く評価されている中国の敦煌莫高窟壁画は経年による剝落等の損傷が著しく、その保存修復の対策が急務となっている。昭和59年の日中両国外相会談及び昭和60年の日中文化交流政府間協議において、これらの保存に関する日中協力が合意された。当研究所は本年度からこれに関わる調査研究事業を政府開発援助(O. D. A)予算として認められ、下記の事業を実施した。

(1) 敦煌莫高窟壁画保存修復協会議

本事業の進め方について総合的な検討を行うため、美術史、保存科学、環境保全、修復技術等にかかる専門家からなる12名の委員、当研究所の関係者、文化庁の担当者による会議を現地調査の前後2回——昭和61年10月20日と昭和62年2月26日——開催した。

(2) 中国への専門家の派遣

第一回訪中団として下記のメンバーが昭和61年11月9～20日に訪中し、本調査研究事業の今後の進め方等について中国側関係者——中国文化部文物局、対外連絡局、文

調査研究

物保護科学研究所，敦煌研究院関係者——と協議を行い，また，敦煌滞在中(13日～16日)敦煌莫高窟壁画の保存状態，環境条件等の現地調査を行った。

団長	内田弘保	文化庁文化財保護部長
	伊藤延男	東京国立文化財研究所長
	江本義理	東京国立文化財研究所保存科学部長
	福田正己	北海道大学低温科学研究所助教授
	鶴田武良	東京国立文化財研究所情報資料部写真資料研究室長
	黒崎勝之	文化庁文化財保護部伝統文化課長補佐

(3) 中国からの専門家の招へい

昭和62年3月19日～28日，呉春徳中国文化部文化連絡局副局长を団長とする6名の中国訪日団が日本を訪れ，文化財の保存修復に関する調査を行うとともに日本側関係者との協議を行った。

(4) 日中共同研究

中国敦煌研究院保護研究所副所長の李最雄氏が，昭和61年12月から昭和62年3月までの4ヶ月間，当研究所修復技術部において日中共同研究「中国石窟の保存を目的とした珪酸塩による石材の強化保存処置に関する実験的研究」を行った。

7. 主要研究業績

①：著書・編書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表 ⑤：講演・放送 ⑥：その他
昭和61.4～昭和62.3

美術部

柳澤 孝(美術部長)

② 真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵 (五) 「美術研究」337 62. 2

関口 正之(第一研究室長)

④ 日本仏画における釈迦八相図について

美術部・情報資料部公開学術講座 61. 11

三輪 英夫(第二研究室長)

② 百武兼行「格闘図」の周辺 「季刊 本の手帖」XXXIX 昭森社 61. 9

主要研究業績

- ② 原田直次郎と歴史画(共同執筆) 「美術研究」337 62. 2
- ⑤ 明治洋画と西洋 静岡県立美術館 61. 9
- ⑤ 明治中期の洋画 一白馬会を中心に一 神奈川県立博物館 61.11

田実 栄子(主任研究官)

- ② 日光山輪王寺伝来胴着三領並びにそれらの修理及び復元模造について 下
「美術研究」336 61. 8
- ③ 「日本大百科全書 全25巻 小学館」の染織・服飾関係項目を分担執筆,完了
した。 62. 2
- ④ 室町・桃山時代の小袖と胴服 一特にその意匠について一
美術史学会東支部例会 62. 1

- ⑥ 仙台市博物館からの依頼で,新出の桃山・江戸初頭服飾類12点の調査と,仙
台市博物館学芸員にその価値解明及び資料取扱法・調査法を指導した。 62. 3
- ⑥ 「山邊知行先生執筆文献目録」 山邊コレクションⅦ 別冊 源流社 61.10

三宅 久雄(主任研究員)

- ② 仏師行快の事蹟 「美術研究」336 61. 8
- ⑤ 飛鳥仏から鎌倉仏まで 川越市古谷公民館 61. 9~61.10
- ⑤ 仏像鑑賞講座 大宮市大宮公民館 61.10~61.11

佐藤 道信(第二研究室)

- ② フェノロサと周辺の画家達 「Lotus」7 62. 2
- ② 狩野芳崖<文明開化の間に> 「三彩」473 62. 2
- ③ 「明治・大正・昭和の仏像仏画」 Vol. 2・3 作品解説 講談社 62. 1~2
- ③ フェノロサ・芳崖の革新的日本画団体鑑画会における作品作家に関する調査
研究 「鹿島美術財団年報」3 61.12
- ④ 在米近代日本画について 明治美術研究学会例会 61.12
- ④ 在米近代日本画について 美術部・情報資料部研究会 61.12
- ④ 在米晩斎作品について 河鍋晩斎研究会例会 62. 1
- ④ フェノロサ・芳崖の革新的日本画団体鑑画会における作品作家に関する調査
研究 鹿島美術財団研究発表会 62. 2
- ⑤ 近代日本画と西洋絵画融合の歩み 美術部・情報資料部公開学術講座 61.11

調査研究

山梨絵美子(第二研究室)

- ② 美術 1. アメリカ絵画史 2. 肖像彫刻から芸術へ 3. 建築と工芸の流れ
「アメリカ・ハンドブック」三省堂 61. 10
- ② 明治20年セオドア・ウォレス展の「安仲」による展評をめぐって
明治美術研究学会第19回研究報告 61. 12
- ② 小林清親『高輪牛町隴月景』をめぐって —明治期におけるアメリカ美術の影響
(上) 「美術研究」338 62. 3
- ④ 明治20年セオドア・ウォレス展の「安仲」による展評をめぐって
明治美術研究学会第19回例会 61. 12
- ④ 小林清親「高輪牛町隴月景」をめぐって 美術部・情報資料部研究会 62. 1

芸能部

三隅 治雄(芸能部長)

- ① 芸能の谷 全4巻 新葉社 61. 8~12
- ③ アジアにおける仮面の芸能 国際研究集会 「月刊文化財」276 61. 9

佐藤 道子(演劇研究室長)

- ② 日本における仏教行事と仮面芸能 —鬼を中心に— 「季刊自然と文化」 61. 12
- ③ 比叡山の伝統行事 「月刊文化財」 61. 4
- ④ 醍醐寺における悔過会の諸問題 顕密仏教研究会 61. 4
- ④ 日本における仏教行事と仮面芸能 —鬼を中心に— 国際研究集会 61. 9
- ⑥ イタリアの若者と 「環」12号 61. 9

廣瀬 美都(演劇研究室)

- ② うたとかたりをめぐる音声様式化の諸相
「口頭伝承の比較研究Ⅲ」 弘文堂 61. 12

蒲生 郷昭(音楽舞踊研究室長)

- ② 長唄正本研究④④~④⑤(共同研究) 「邦楽と舞踊」430~441 61. 4~62. 3
- ② 演歌歌唱法の二、三の側面について
——メログラフを用いて森進一とベルカント唱法とを比較する——
「諸民族の音——小泉文夫先生追悼論文集」 音楽之友社 61. 7

② 音楽取調掛における長唄詞章の改良について

「音楽と音楽学——服部幸三先生還暦記念論文集」音楽之友社 61.11

② 初期の三味線を絵画に見る(1)～(2) 「季刊邦楽」49～50 61.12～62. 3

③ 邦楽用語辞典 補遺編(3)～(4) 「季刊邦楽」47～48 61. 6～61. 9

③ 「千野の摘草」解説 「千野の摘草」 べりかん社 61. 8

④ 近世初期風俗画に描かれた三味線について 東洋音楽学会定例研究会 61. 9

⑥ 音遣い、豊竹筑前少掾、豊竹比太夫(井野辺潔・横道萬里雄ほか)

「義太夫節の様式展開」 アカデミアミュージック 61.11

高桑いづみ(音楽舞踊研究室)

④ 平岩流唱歌付をめぐる一考察 東洋音楽学会大会 61.10

羽田 紘(民俗芸能研究室長)

① 能の作者と作品(横道萬里雄・西野春雄と共著) 岩波書店 62. 1

③ 国立能楽堂の能と狂言 「月刊文化財」 61. 9

④ 能・狂言における仮面の用法 国際研究集会 61. 9

⑤ 復曲能「三山」解説 NHKTV 61. 5

⑥ 書評；堂本正樹「世阿弥」 東京新聞 61. 5

⑥ 書評；古川久・小林貞「狂言辞典 資料編」 能楽タイムズ 61. 6

⑥ 復曲狂言「狸腹鼓」演出協力 国立能楽堂 61.10

中村 茂子(主任研究官)

④ ささらと芸能 芸能部夏期学術講座 61. 7

④ ささらを使う芸能 —風流踊を中心に— 民俗芸能学会研究例会 62. 3

仲井幸二郎(民俗芸能研究室)

③ 口訳民謡集⑦⑧～⑧⑨(連載) 「みんよう文化」 61. 4～62. 3

酒屋唄・津軽山唄・北海よされ節・稗搦節・北海盆唄・網のし唄・岩室甚句
やがえ節・安来節・粘土節・金毘羅船々・祖谷の粉ひき唄

③ 「日本の民謡」解説 国立劇場公演「日本の民謡」プログラム 62. 2

⑤ 民謡人の常識 財団法人日本民謡協会民謡教養講座 61. 6

⑤ うたと日本人 財団法人日本民謡協会民謡教養講座 61. 7

⑤ 日本民謡の知識 民謡文化協会研修会 61. 7

調査研究

- ⑤ 民謡指導者の心得 ビクター民謡研究会(名古屋) 62. 2

保存科学部

江本 義理(保存科学部長)

- ① 水中考古学—引揚げ遺物の保存
「続 考古学のための化学10章」 東京大学出版会 61. 4
- ① 高松塚古墳の状況及び調査活動に伴う保存科学的処置について
「国宝 高松塚古墳壁画—保存と修理」 文化庁 62. 3
- ② サントリー美術館所蔵の中国清代に製造されたガラス容器の蛍光X線分析
(富沢, 富永, 土屋と共著) サントリー美術館 論集2号 62. 3
- ② 文化財の材質と劣化「文化財の虫菌害と保存対策」 縄文化財虫害研究所 62. 3
- ⑤ 文化財の科学的保存について
第2回写真保存シンポジウム 日本写真学会 61. 7
- ⑤ 保存科学概論, 彩色材料 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 61. 8
- ⑤ 史料の保存科学 近世史料取扱講習会 61. 9

馬淵 久夫(化学研究室長)

- ② 青銅器の鉛同位体比測定
栃木県埋蔵文化財報告書76 「星の宮神社古墳・米山古墳」 61. 3
- ② 新保遺跡出土青銅器の鉛同位体比測定 「新保遺跡Ⅰ」 61. 3
- ② 広島県千代田町中出勝負峠墳墓群出土銅鏡の鉛同位体比
広島県埋文センター調査報告49 「歳之神遺跡群・中出勝負峠墳墓群」 61. 3
- ② 古代韓国青銅器に対する小考 「大韓金属学会誌」別冊 24—4 61. 4
- ② 月見城遺跡ST2出土銅鏡の鉛同位体比
広島県埋文センター調査報告54 「月見城遺跡」 62. 3
- ② 朝日観音古墳群出土青銅器の鉛同位体比
南河内町埋蔵文化財調査報告書2 「朝日観音遺跡」 62. 3
- ② 瑞雲双鷺八花鏡の鉛同位体比
「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1」 62. 3
- ③ 考古学と化学 「化学工業」37-8 61. 8

- ③ 考古遺物に秘められた情報 「科学」56-9 61. 9

- ④ 古代青銅原料のキャラクターゼーション

第22回応用スペクトロメトリー東京討論会(東京商船大学) 62. 3

- ⑤ 日本の古代史の謎に迫る青銅器のさびの分析 腐食防食協会講演 61. 4

- ⑤ 金銅仏の鉛同位体比の測定について

第19回東京国立博物館資料館セミナー 62. 3

見城 敏子(物理研究室長)

- ② 赤色色素の変退色 「保存科学」第26号 62. 3

- ② Certain Deterioration Factors for Works of Art and Simple Devices
to Monitor Them

The International Journal of Museum Management and Curatorship

1986, 5

- ⑤ 文化財の保存環境 文化財保存対策研究所 61. 4

- ⑤ 文化財の保存対策 勸文化財虫害研究所 61. 9

新井 英夫(生物研究室長)

- ① 文化財における防菌防黴 「防黴ハンドブック」 技報堂 61. 5

- ① Il biodeterioramento dei beni culturali: libri documenti opere grafiche.

「SCRIPTA VOLANT」 PARKER 61. 7

- ① 文化財の防菌防黴剤 「防菌防黴剤事典」 日本防菌防黴学会 61. 8

- ① Antimicrobial Factors Found in Virgin Tumuli

『Biodeterioration 6』 ABC International Mycological Institute 61. 12

- ① 文化財劣化微生物(黴・細菌), 博物館等における燻蒸庫, 文化財の生物劣化
防除対策 「文化財の虫害と保存対策」 勸文化財虫害研究所 62. 3

- ① 高松塚古墳壁画の微生物学的環境とその対策

「国宝・高松塚古墳壁画 一保存と修理一」 文化庁 62. 3

- ② 文化財保存科学における走査電子顕微鏡の利用(I), (II)

古代漆下地技法と紙の褐色斑解明への試み(見城, 鈴木と共著)

「日本電子ニュース」26(2), (3) 61. 4, 6

調査研究

- ② 酸性紙の中和について(第2報) ジェチル亜鉛による上質紙の中和処理条件
(森, 井上らと共著) 「文化財の虫菌害」11 61. 7
 - ② Application of Scanning Electron Microscope in the Field of Conservation Science of Cultural Properties (T. Kenjo & T. Suzuki と共著)
「JEOL news」25E(1) 62. 1
 - ② 紙質類文化財の保存に関する微生物学的研究(第5報) Foxing から分離した糸状菌の生理的・形態学的性質, foxing 形成機構および防除対策について
「保存科学」26 62. 3
 - ③ 森八郎博士の叙勲の栄をたたえて 「文化財の虫菌害」11 61. 7
 - ③ 紙の褐色斑点について —その正体と防止策— 「印刷情報」47(2) 62. 2
 - ④ 紙質類文化財の保存に関する微生物学的研究(第4報) 3種類の異なる要因による foxing について 第8回古文化財科学研究会大会 61. 5
 - ④ 絵画等に発生した絶対好稠性糸状菌と *Beauveria* sp. について
日本菌学会第30回大会 61. 5
 - ④ レンズを劣化する糸状菌について
第6回細管・等速電気泳動シンポジウム 61. 12
 - ⑤ 文化財の保存と生物学 中華民国国立故宫博物院 61. 7
 - ⑤ 美術館における収蔵物の保存法 —生物による被害とその防除法—
台北市立美術館 61. 7
 - ⑤ 文化財保存科学における生物学的研究 台南市政府 61. 8
 - ⑤ 文化財の生物劣化 —虫菌害— 博物館・美術館等保存担当学芸員研修会 61. 8
 - ⑤ 文化財の微生物による被害とその防除(第8回文化財虫菌害保存研修会)
朝文化財虫害研究所 61. 9
 - ⑤ 書籍を保存する NHKラジオ第1「話題の指定席」 61. 12
 - ⑤ 文化財虫菌害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会
朝文化財虫害研究所 62. 2
- 門倉 武夫(主任研究官)
- ② 建造物彩色に用いられる顔料のX線回折法による分析
「科学研究費報告書」 62. 3

主要研究業績

- ② 高松塚古墳壁画修理の溶剤蒸気除去対策 「国宝高松塚古墳壁画」 —保存と修復— 文化庁 62. 3
- ② 三ヶ日町出土銅鐸の腐食生成物の分析結果 「受託研究報告書」 62. 3
- ⑤ 日本における油彩画の劣化について 第8回文化財科学研究会講演会大会 61. 5
- ⑤ 展示環境Ⅱ —環境と劣化— 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 61. 8
- 石川 陸郎(主任研究官)
- ② 古文化財とX線写真(2) 「軟X線の科学」Vol. 2, No. 2 61. 8
- ② 坂東谷遺跡出土鉄板について 坂東谷遺跡発掘報告書 62. 1
- ② 彩色建造物に用いられる顔料の劣化試験 「科学研究費報告書」 62. 3
- ④ 紫外線の絵画への応用 保存科学部研究会 61. 5
- ⑤ 文化財展示照明 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修会 61. 8
- ⑤ 科学写真の文化財への応用 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修会 61. 8
- 三浦 定俊(主任研究官)
- ① 高松塚古墳の温湿度(斉藤平蔵と共同) 国宝・高松塚古墳壁画—保存と修理— 文化庁 62. 3
- ② エミシオグラフィによる絵馬の調査(神庭信幸と共同) 「保存科学」26 62. 3
- ② ドーサによる和紙の劣化(増田勝彦と共同) 「科学研究費報告書」 62. 3
- ④ 鶴林寺太子堂調査におけるエミシオグラフィの利用 第8回古文化財科学研究会大会 61. 5
- ④ 二次電子放射を利用したX線撮影法の日本絵画調査への応用 第24回 SICE 学術講演会 61. 7
- ④ エミシオグラフィに用いるフィルムの選択 保存科学部研究会 61. 9
- ⑤ 温湿度の計測, 測定器機の補正, 科学写真の文化財への応用 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修会 61. 8
- ⑥ ハイテクでのぞく歴史の謎 「ウータン」 61. 7
- ⑥ 砂漠地帯・温帯における岩壁美術の保存: その術語集(仏文和訳) 「保存科学」26 62. 3

調査研究

森 八郎(生物研究室)

- ① 文化財の虫菌害と保存対策(伊藤, 登石, 江本, 樋口, 見城, 新井, 増田ほか共著) 勸文化財虫害研究所 62. 3
- ② 昭和25年御遺体調査を担当して 私の平泉(中尊寺) 61. 4
- ② 酸性紙の中和について(第2報) ジェチル亜鉛による上質紙の中和処理条件 「文化財の虫菌害」11 61. 7
- ② 防虫・防黴額縁について(予報) 「保存科学」26 62. 3
- ③ Distribution, Damage, Current and Potential Control Measures of the Formosan Subterranean Termite, *Coptotermes formosanus* Shiraki, in Japan.(英文) 「古文化財の科学」31 61. 12
- ④ 防虫・防黴額縁について(予報) 第8回古文化財科学研究会大会 61. 5
- ⑤ トライ&トライ(シロアリの道しるべフェロモン) NHK・TV 61. 5
- ⑤ クローズ アップ(シロアリ) NHK・TV 61. 6
- ⑤ 文化財の虫害と防除(第8回文化財虫害保存研修会) 勸文化財虫害研究所 61. 9
- ⑤ 文化財虫害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会 勸文化財虫害研究所 62. 2

鈴木 友也(修復技術部長)

- ① 大山祇神社と武士の信仰 「国宝への旅」第4巻 日本放送出版協会 61. 12
- ② 文化財保存修理論(試論) 「保存科学」26 62. 3
- ⑤ 武士の晴姿 —美意識と信仰— 熱田神宮, 中日新聞社 61. 1
- ⑤ 保存修復概論 博物館, 美術館等の保存担当学芸員研修 61. 8
- ⑤ 工芸品の修復と調査 61年度指定文化財展示取り扱い講習会 文化庁 61. 9

中里 寿克(第1修復技術研究室長)

- ② 鎌倉時代漆芸技法資料Ⅰ 補遺 —梅蔭絵手箱 三嶋大社蔵— 「保存科学」26 62. 3

増田 勝彦(第2修復技術研究室長)

- ③ 古文化財科学研究会の沿革と第8回大会よりの所感 「月刊文化財」274 61. 7
- ③ 土佐典具帖紙 いの町紙の博物館 62. 3

主要研究業績

- ③ Japanese paper and Hyogu 「The Paper Conservator」9 62. 3
- ③ 和紙の製造 「文化財の虫菌害と保存対策」 勸学文化財虫害研究所 62. 3
- ④ 「報告」 斜光照明装置 「保存科学」26 62. 3
- ⑤ 表具の科学 博物館、美術館等の保存担当学芸員研修 61. 8
- ⑤ 欧米における紙本文化財の修復について
61年度指定文化財修理技術者講習会 文化庁 61. 9
- ⑤ 紙製文化財の保存 第5回文化財保存研修会 群馬県立歴史博物館 61.10
- ⑤ 史料の保存科学 近世史料取扱講習会 国立史料館 61.10
- ⑤ 金唐壁紙の復元 文化財保存修復研究協議会 61.10
- ⑤ 資料の修理 一歴史資料一
61年度歴史民俗資料館等専門職員研修会 国立歴史民俗博物館 61.12
- ⑤ 外国における文化財修理のための和紙
高知県手漉和紙組合研修会 高知県手漉和紙組合 62. 2
- ⑤ 和本、古文書の保存と修復 一漉嵌機による修復一 資料保存研究会例会
資料保存研究会 62. 3
- ⑤ 図書館のための保存科学 1986年図書館大会第12分科会 図書館協会 62. 3
- ⑥ 高松塚古墳壁画の損傷状況とその修理(渡辺と共著)
「国宝高松塚古墳壁画 一保存と修理一」 文化庁 62. 3
- ⑥ 高松塚古墳壁画修理記録原図の作成
「国宝高松塚古墳壁画 一保存と修理一」 文化庁 62. 3
- ⑥ 高松塚古墳壁画の修理工具と使用材料(渡辺と共著)
「国宝高松塚古墳壁画 一保存と修理一」 文化庁 62. 3
- 樋口 清治(第3修復技術研究室長)
- ② 顔料彩色層(胡粉、黄土)の粉状剝落の防止処置について(岡部と共著)
「保存科学」26 62. 3
- ② 手宮洞窟保存修理にかかわる合成樹脂処置について
「手宮洞窟保存修理調査委員会報告書」 61. 7
- ② 石塔の樹脂処置 「重要文化財五輪塔(鎌田家)修理工事報告書」 62. 3
- ② 文化財の保存・修復と合成樹脂

調査研究

- 「文化財の虫菌害と保存対策」(財)文化財虫害研究所 62. 3
- ② 高松塚古墳壁画の剝落どめと合成樹脂
「国宝高松塚古墳壁画 —保存と修理—」文化庁 62. 3
- ③ 文化財の保存処理 —木材・石材—
「コンセルボ」No. 7 文化財保存計画協会 61. 6
- ⑤ 保存材料 埋蔵文化財発掘技術者研修会 61. 5
- ⑤ 文化財の修理 —主として木造、石造文化財を中心に—
東京都文化財セミナー 61. 6
- ⑤ 部材の科学的補修 文化財建造物修理技術者講習会(上級コース) 61. 9
- ⑤ 合成樹脂による文化財の保存と修復
第8回文化財の虫菌害保存対策研修会 61. 9
- ⑤ 美術工芸品の修理と合成樹脂 61年度指定文化財修理技術者講習会 61. 9
- ⑤ 民俗資料の修理 61年度歴史民俗資料館等専門職員研修会 61. 12
- 西浦 忠輝**(主任研究官)
- ② シラン含浸処理に伴う石材の変色に関する研究(第1法); 測色計による変色の解析: 石造文化財の保存・修復処置に関する研究 「古文化財の科学」31 61. 12
- ② 中国の石窟の保存を目的とした珪酸塩による石材の強化、保存処置に関する実験的研究(李と共著) 所内報告, 敦煌研究院報告 61. 3
- ④ シラン含浸処理に伴う石材の暗色化に関する実験的研究
第8回古文化財科学研究会講演大会 61. 5
- ④ 我が国における磨崖仏の保存について 保存科学部研究会 61. 7
- ④ Conservation of Rock-cliff Sculpture in Japan
11th IIC Congress in Bologna 61. 9
- ④ 撥水性シラン処理石材からの水の蒸発と塩結晶による破壊挙動
奈良国立文化財研究所保存科学研究集会 62. 2
- ⑥ 第11回IIC大会に参加して 「保存科学」26 62. 3
- 青木 繁夫**(主任研究官)
- ② 筑波山古墳出土鉄製品の錆の安定化処理に関する研究 「保存科学」26 62. 3

主要研究業績

- ④ 日本における青銅遺物の保存修復について
 文物の保存技術に関するアジア地区セミナー 61. 4
- ③ 文物の保存技術に関するアジア地区セミナーに参加して
 「日本文化財科学会会報」12 61. 12
- ⑤ 金属文化財の保存修復 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 61. 8
- ⑥ 三ヶ日町猪久保遺跡出土銅鐸の保存修復に関する研究 「受託研究報告」 62. 3
- ⑥ 高松塚古墳出土金属製品の応急的保存処理
 「国宝・高松塚古墳壁画 —保存と修理—」文化庁 62. 3

情報資料部

宮 次男(情報資料部長)

- ② 八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 下 「美術研究」336 61. 8
- ② 妙法寺藏妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅について 「美術研究」337 62. 2
- ② 八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 附載1 「美術研究」339 62. 3
- ⑤ 戦記絵巻について 国文学研究資料館 61. 7

米倉 迪夫(文献資料研究室長)

- ④ 日本東洋古美術文献目録とそのデータベース化
 美術部・情報資料部研究会 61. 7
- ④ 法然上人伝と靈驗図 東京国立文化財研究所総合研究会 62. 3
- ④ 法然上人伝絵の諸本について 金沢文庫学芸部 62. 3
- ② 法然上人伝絵と靈驗図—法華經靈驗図を中心として— 「美術研究」339 62. 3

鶴田 武良(写真資料研究室長)

- ② 鉄翁・逸雲・湘帆について 「国華」1098 61. 12
- ③ 米国現在中国画書所在一覧 「Museum」422 61. 5
- ③ 郭英声竟是中国入 台湾・民生報 1986. 11
- ④ 来舶画人研究について 美術部・情報資料部研究会 61. 4
- ④ Japanese Influence on Gao Jianfu 香港中文大学 61. 5
- ⑤ 来日中国人画家と舶載明清画 台湾・台南市文化センター 61. 10
- ⑤ 来舶画人を通して見た明清絵画 台湾・台北、行政院文化建設委員会 61. 10

調査研究

- ⑥ 中国のイエシロアリ属(翻訳) 「文化財の虫菌害」12 61.10

鈴木 廣之(写真資料研究室)

- ② ラクダを描く 一円山応震筆駱駝図をめぐる一 「美術研究」338 62. 3

- ② 三溪園臨春閣障壁画の復元的考察 「美術研究」339 62. 3

- ④ 日本・東洋古美術関係文献データベースについて(共同発表)

日仏美術学会全国大会 61.10

島尾 新(文献資料研究室)

- ② 常盤山文庫蔵柿本人麿像について 「美術研究」338 62. 3

- ④ 日本・東洋古美術関係文献データベースについて(共同発表)

日仏美術学会全国大会 61.10

- ④ 柿本人麿像について

美術部・情報資料部研究会 61.12

Ⅳ. 事 業

1. 出 版

(1) 美術研究

61年度は336号から339号までが下記の内容で刊行された。A4判，各号40頁，原色図版2，単色図版8。

美術研究 336号(昭和61年8月)

仏師行快の事蹟	三宅 久雄
八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 下	宮 次男
日光山輪王寺伝来胴着三領並びにそれらの修理及び復元模造について 下	
	神谷 栄子

美術研究 337号(昭和62年2月)

原田直次郎と歴史画	中江 彬
	三輪 英夫
妙法寺蔵妙法蓮華経金字宝塔曼陀羅について	宮 次男
真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵 (五)	柳澤 孝
日親と墨葡萄	島田修二郎

美術研究 338号(昭和62年3月)

常盤山文庫蔵柿本人麿像について	島尾 新
ラクダを描く 一円山応震筆駱駝図をめぐる一	鈴木 廣之
小林清親『高輪牛町臈月景』をめぐる一	
一明治期におけるアメリカ美術の影響(上)一	山梨絵美子

美術研究 339号(昭和62年3月)

三溪園臨春閣障壁画の復元的考察	鈴木 廣之
法然上人伝絵と靈験図	米倉 迪夫
八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起 附載一(研究資料)	宮 次男

(2) 日本美術年鑑・昭和60年版(昭和62年3月発行)

本年度は昭和59年の内容をもつ昭和60年版を刊行した。B5版, 265頁。

昭和59年美術界年史

美術展覧会(現代美術・西洋美術)

美術展覧会(東洋古美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(現代美術・西洋美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(東洋古美術)

物故者

(3) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査, 研究, 受託研究報告等の論文, 報告及び修復処置概報等を掲載している。本年度は第26号を発行した。

保存科学 第25号(昭和63年3月発行)

文化財保存修理論(試論)

鈴木 友也

顔料彩色層(胡粉, 黄土)の粉状剝落の防止処置について

樋口清治・岡部昌子

エミシオグラフィによる絵馬の調査

三浦定俊・神庭信幸

赤色色素の変退色

見城 敏子

筑波山古墳出土鉄製品の錆の安定化処理に関する研究(受託研究報告第58号)

青木 繁夫

紙質類文化財の保存に関する微生物学的研究(第5報)

新井 英夫

鎌倉時代漆芸技法資料 I 補遺

中里 寿克

〔報告〕斜光照明装置

増田 勝彦

防虫防黴額縁について(予報)

森 八郎

第11回 I I C 大会に参加して

西浦 忠輝

砂漠地帯・温帯における岩壁美術の保存: その術語集

J. ブリュネ・P. ヴィダル・J. ヴーヴェ・三浦定俊(訳)

イクロム作成のキーワード

伊藤 延男

(4) 国際研究集会プロシーディングス

The 9th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property —The Training of Specialists in Various Fields Related to Cultural Properties— (1986)

「各種文化財に関する専門家の養成」を主題とした、所長担当の国際研究集会(60. 11. 18~11. 21)のプロシーディングス(英文)を刊行した。今回は、博物館等における文化財保存の技術者、各種文化財の修復技術者の養成ならびに伝統芸能の後継者の養成に関連した内容を取扱った。本プロシーディングスには、発表論文、質疑応答、総合討議などが含まれている。内容は下記のとおりである。

PART ONE

Summarizing Reports on the Situations of Training in Various Countries
and Regions

Colin PEARSON : Conservation Training in Australia

Yuxin ZHANG : A Brief Reports on the Education and Training of Cultural
Relic Specialists in China

Om Prakash AGRAWAL : Status of Training in India in the Fields of Ar-
chaeology, Museology and Archival Management

Haryati SOEBADIO : Training of Specialists in Various Fields Related to
Cultural Properties —Summary of the Situation in Indonesia—

Nobuo ITO : Present Condition of the Training of Specialists in the Con-
servation of Cultural Properties in Japan

Tae Young LEE : Present State of Conservation Specialist Training in the
Republic of Korea

Johan LODEWIJKS : The Training of Restorers in the Netherlands

Wannipa NA SONGKHLA : Training of Specialists on Conservation in Thai-
land

Cevat ERDER : Training for Conservation of Cultural Property in Turkey

PART TWO

Detailed Reports on the Training of Specialists in Various Fields

Kunio FUJITA : Training of Museum Officers in the Course of Higher Education

Yuxin ZHANG : The Present Condition and Training of Museum Specialists in China

Kyotaro NISHIKAWA : Training Courses for Museum Curators and Restorers of Art Objects

Tomoya SUZUKI : Preservation of the Techniques of Applied Arts and the Training of Their Transmitters and Restorers

Johan LODEWIJKS : The Training of Restorers

Yukio ENOMOTO : Training of Transmitters of Traditional Performing Arts at the National Theater of Japan

Haryati SOEBADIO : Training of Specialists in Various Fields Related to Cultural Properties —The Situation in Indonesia—

Eizo INAGAKI : Training of Architects as Conservators in the Course of Higher Education in Japan

Wannipa NA SONGKHLA : Training of Specialists in Conservation of Mural Paintings

Kakichi SUZUKI : Training of Conservation Specialists for Cultural Property Buildings

Om Prakash AGRAWAL : Status of Training Courses in Conservation

Yoshimichi EMOTO : Training of Conservation Scientists in the Course of Higher Education and through Refresher Courses Sponsored by the Tokyo National Research Institute of Cultural Properties

Tae Young LEE : A Proposal for the Curriculum and Syllabus of the Scientific Principles on the Training of Conservation Specialists

Kiyotari TSUBOI : Training of Archaeologists in the Course of Higher Education and through Refresher Courses Sponsored by the Nara National

Cultural Properties Research Institute

Colin PEARSON : Training in the Conservation of Cultural Materials in
Australia

Cevat ERDER : ICCROM and Training for the Conservation of Cultural
Properties

Overall Discussion

2. 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作の多くを所蔵している本研究所は、黒田清輝の功績を記念し併せて
地方文化の振興に資するために、昭和52年度からの事業として黒田清輝巡回展を年1
回地方において開催してきた。

本年度は特に地元の要請により豊橋市で開催した。

会 場 豊橋市美術博物館

会 期 昭和61年9月20日～10月12日

主 催 東京国立文化財研究所・豊橋市美術博物館

開催日数 20日間

入場者数 12,483人

陳列点数 油彩・パステル58点、木炭デッサン50点、写生帖17冊、書簡3点、

日記5冊、参考資料若干

図 録 A4判変型、114頁、原色版8頁、単色版74頁

3. 公開学術講座

美術部・情報資料部(第20回)

日 時 昭和61年11月29日(土) 13:30～16:30

会 場 日本経済新聞社小ホール(9階)

講 演 (1) 近代日本画と西洋絵画融合の歩み 美術部第二研究室 佐藤 道信

(2) 日本仏画における釈迦八相図について

美術部第一研究室室長 関口 正之

4. 夏期学術講座

芸 能 部

芸能部においては、芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として、例年、夏期4日間にわたる学術講座を実施している。会場を東京国立文化財研究所会議室とし、芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に講ずるかたちをとる。61年度は「採り物と芸能」というテーマを設け、中村茂子(主任研究官)が担当し、7月7日から7月10日までの4日間にわたり実施した。受講対象は都内各大学の大学院生とし、本年度は、早稲田・慶応・明治・学芸大学・国立音大の各大学院生で、受講者数は14名。日程及びテーマ細目は下記のとおりである。

7月7日(月)

1. ささら概論
2. 田楽芸とささら (1) 田楽躍の編木と^{ささら}箆
3. 田楽芸とささら (2) 田遊の箆

7月8日(火)

4. 田楽芸とささら (3) 田植踊のささら
5. 風流芸とささら (1) 風流踊を中心に
6. 風流芸とささら (2) 三匹獅子Ⅰ

7月9日(水)

7. 風流芸とささら (3) 三匹獅子Ⅱ
8. 風流芸とささら (4) 三匹獅子Ⅲ
9. 巡遊芸とささら (1) 大神楽の箆

7月10日(木)

10. 巡遊芸とささら (2) 念仏聖・説経
11. 巡遊芸とささら (3) 千秋万歳他
12. 質疑応答

5. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

近年、地方においては博物館・美術館等の数が増加すると共にその施設が近代化し、くん蒸室、保存科学室、修復室等の保存に関する部門や施設設備が整備されて、学芸員のうちからこれら保存部門を担当する職員が配置されてきている。しかし、それらの職員が保存科学、技術の知識を習得しようとしても適切な学習の場や教材がないのが実情である。そのため博物館・美術館等の学芸員で保存を担当する者に対して、文化財の科学的保存に関する基礎的な知識及び技術について研修を行い、その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし研修会を開催した。受講者数15名。日程及び研修題目・講師は下記のとおりであった。

8月18日(月)

1. 開会式・オリエンテーション

2. 保存科学概論

保存科学部長 江本 義理

3. 人文科学と自然科学

所 長 伊藤 延男

8月19日(火)

4. 男海外における保存制度・専門家要請の動向

伊藤 延男

5. 文化財の分析化学 I

保存科学部化学研究室長 馬淵 久夫

6. 文化財の分析化学 II

馬淵 久夫

8月20日(水)

7. 保存修復概論

修復技術部長 鈴木 友也

8. 展示環境 I 一環境と劣化一

保存科学部主任研究官 門倉 武夫

9. 施設見学 一東京国立博物館・資料館・法隆寺館環境コントロール室一

門倉 武夫

8月21日(木)

10. 文化財の有機化学 一漆・にかわ一

保存科学部物理研究室長 見城 敏子

11. 文化財の生物劣化 一虫害と対策一

保存科学部生物研究室長 新井 英夫

事 業

12. 実 習 —虫・かび害と対策 I—

新井 英夫

8 月 22 日(金)

13. 湿温度の計測

保存科学部主任研究官 三浦 定俊

14. 文化財の照明

保存科学部主任研究官 石川 陸郎

15. 実 習 —光源の扱い—

石川 陸郎

8 月 23 日(土)

16. 彩色材料

江本 義理

8 月 25 日(月)

17. 実 習 —くん蒸—

新井 英夫

18. 展示環境 II —因子と劣化—

見城 敏子

19. 実 習 —展示環境—

見城 敏子

8 月 26 日(火)

20. 表具の科学

修復技術部第二修復技術研究室長 増田 勝彦

21. 実 習 —表 具—

増田 勝彦

22. 金属文化財の保存修復修

復技術部主任研究官 青木 繁夫

8 月 27 日(水)

23. 実 習 —温湿度機器の補正—

三浦 定俊

8 月 28 日(木)

24. 科学写真の文化財への応用

石川 陸郎

三浦 定俊

25. 実 習 —科学写真 I—

石川 陸郎

26. 実 習 —科学写真 II—

石川 陸郎

8 月 29 日(金)

27. 実 習 —科学写真 III—

三浦 定俊

28. 文化財の修復と合成樹脂

修復技術部第三修復技術研究室長 樋口 清治

29. 実 習 —合成樹脂—

樋口 清治

8 月 30 日(土)

30. レポート作成・閉会式

6. 会 議

文化財の保存および修復に関する研究のための国際研究集会

昭和52年度より毎年開催している上記の集会の本年度(第10回)は、「アジアにおける仮面の芸能」をテーマとして、芸能部の担当で開催した。

今回は、仮面芸能研究の視点をアジア全域に求め、関係各国の研究者の参集を仰いで、アジアにおける仮面芸能の発展と交流の歴史をただすことを目的とした。その具体的内容は、各発表題目のとおりである。

発表者は海外7名、国内9名、発表は3セッションに分けて以下の日程で行われた。

名 称 The 10th International Symposium on the Conservation and
Restoration of Cultural Property
—Masked Performances in Asia—

日 時 昭和61年9月30日(火)～10月2日(木)

場 所 社会教育研修所

(題名および発表者)

9月30日(火)

【講 演】

1. Masked Performance Studies —Their Present State and Future Issues—
(仮面芸能研究の現状と将来) 文化財保護審議会委員 本田 安次

2. Masked Drama East and West (仮面劇の東と西)

トロント大学 F・ホーフ

【第1セッション】 Demons, Deities and Religious Ceremonies (鬼神と信仰儀礼)

1. A Study of Oni in Masked Performances at Japanese Buddhist Ceremonial Occasions (日本の仏教行事に見られる鬼の芸能)

東京国立文化財研究所 佐藤 道子

2. The Living Tradition of the Astamatrica Dance-Drama in the Kathmandu Valley, Nepal(ネパール, カトマンズ盆地における舞踊劇アスタマトリカの生きた伝統)
ネパール, トリブバン大学 T・D・ジョシ

事 業

3. An Oni—A Leading Character of a Masked Observance (鬼—仮面行事の
主役) 写真家 芳賀日出男
4. Masked Festival and Folklore in Ladak —With the Masked Dances of
the Hemis Monastery as the Center of Discussion— (ラダックにおける仮面
の祭りと民俗 —ヘミス寺院の仮面舞踊を中心に—) 早稲田大学 高山 茂
5. Various Aspects of Demon Masks and Their Development as Nô Masks
(鬼神面の種々相) 文化庁文化財保護部 田辺三郎助

10月1日(水)

【第2セッション】 Lion Dances (獅子の舞踊)

6. The Functions of Shishi-mai in Miharū, Japan (三春における獅子舞の機
能) 民俗芸能学会 山本 宏子
7. A Comparative Study of Lion Dances in Japan and Korea —Urayama
Shishi-mai and Pukchong Szamu— (日韓獅子舞の比較研究 —浦山獅子舞と
北青獅子—) お茶の水女子大学 朴 美羅
8. The Lion Dance in China —Comparative Study of Northern Dance and
Southern Dance (中国の獅子舞 —北獅と南獅の比較—)
日本演劇学会 宮尾 慈良
9. “Shishi” and “Baron” —A Humanbiological Approach on Trance-
Inducing Animal Masks in Asia— (獅子とバロン—アジアのトランス誘導性動
物仮面に関する人間生物学的研究—) 筑波大学 大橋 力

【第3セッション】 Masked Dance-Dramas (仮面舞踊劇)

10. Use of the Mask in Nô and Kyôgen (能・狂言における仮面の用法)
東京国立文化財研究所 羽田 昶
11. Distinctive Characteristics of Masked Dance-Drama in Thailand —Focus-
ing on Roles and Performance (タイにおける仮面芸能の特質—役割と演技に
焦点を当てて) タイ、芸術局国立舞踊学校 C. モントリサート
12. An Essay on Ba —A Tibetan Masked Drama— (チベットの仮面劇『屈』試
論) チベット、中央民族学院 ルオソントウオチー
13. The Folkloristic Background of Korean Masked Dance-Drama (韓国の仮

面劇とその民俗的基盤)

ソウル大学 李 杜鉉

14. Topeng in Contemporary Bali (現代のバリにおけるトベン)

インドネシア, 国立舞踊学校 I・M・バンダム

10月2日(木)

1. 映画「セライケラのチョウ」

2. 質疑応答・討論

司 会・昭和女子大学

後藤 淑

立教大学

小西 正捷

東京国立文化財研究所 三隅 治雄

《参加者》

文化庁及び附属機関・国立劇場・国立能楽堂・国立歴史民俗博物館職員, 諸大学教官, 実技者等124名

保存科学部・修復技術部

第15回文化財保存修復研究協議会

日 時 昭和61年10月16日

会 場 東京国立文化財研究所会議室

主 題 近代の文化財における保存修復の諸問題

近年, 明治期に作られた文化財の指定件数が多くなるとともにそれらの修復について様々な問題が起きている。この協議会はそれらの問題点を整理するとともに今後の対応策について研究協議を行った。

発表課題, 発表者

(1) 近代建築保存修理の問題点

文化庁文化財保護部建造物課文化財主任調査官 伊原 恵司

文化財建造物保存技術協会 山形県旧県会議事堂修理事務所長 木村 勉

(2) 金唐草模造壁紙の復原と修理の問題点

東京国立文化財研究所修復技術部第二修復技術研究室長 増田 勝彦

(3) 民俗資料薬製品の保存修復の諸問題 千葉大学工学部助教授 宮崎 清

(4) 近代日本画の保存の実際 東京国立博物館学芸部美術課建築室長 細野 正信

事 業

- (5) 油絵の保存修復について 創形美術学校修復研究所長 歌田 眞介
(6) 近代彫刻の保存について 一東京芸術大学芸術資料館所蔵品を主として—
東京芸術大学芸術資料館助手 福田 徳樹

昭和61年度文化財の保存に関する懇談会

日 時 昭和62年2月19日(木)

場 所 東京国立文化財研究所会議室

この会議は、文化財の保存及び修復に関し、当研究所と文化庁側との意見交換の場として調査研究が円滑に推進され、また、文化財保護事業が効果的な運営をもたらすことを目的として、文化庁の担当官の出席を求めて懇談している。今年度は、文化財保護部長及び文化財鑑査官を始め、伝統文化課、芸術工芸課及び建造物課の担当官が出席した。

当研究所から主に本年度における各部の調査研究の成果を報告し、次年度の調査研究計画の説明を行った。また、文化庁側から文化財のデータベースについての基本問題、重要文化財荒神谷遺跡出土の銅剣の保存、その他の問題について質疑応答があった。

7. 国際・国内交流

(1) 職員の国際交流

所 長

1. 伊藤所長は、本年度も引き続きイクロム(ローマ国際文化財保存センター)日本代表として、第20回イクロム財政・計画委員会、第40回イクロム理事会及び第14回イクロム総会出席のため、昭和61年5月1日より10日までイタリア国に出張した。
2. ユネスコ、イクロム及びノールウェイ技術研究所「木造文化財保存技術国際」研究コースにおける講義及びポール・グティ文化財保存研究所主催の保存技術討論会出席のため昭和61年6月30日より7月11日までノールウェイ及びアメリカ合衆国に出

かけた。

3. 文化庁訪中団一行として、「敦煌文化財保存修復について」現地関係者との協議及び討議のため、中華人民共和国に昭和61年1月9日より11月20日まで出張した。

美術部

1. 第一研究室長関口正之は、文部省在外研究員として昭和61年8月1日より10月8日まで、アメリカ合衆国、イギリス、フランス、西ドイツにおいて、欧米所在日本仏教絵画の調査研究を行った。
2. 第二研究室長三輪英夫は、「林忠正宛書簡の研究」のため昭和61年9月19日より10月3日まで、フランス、西ドイツ、イギリスにおいて、関連資料の調査・収集を行った。

芸能部

三隅治雄芸能部長は、国際交流基金による東南アジアへの沖縄芸能派遣事業に講師として帯同し、昭和61年6月26日から7月12日まで、インドネシア及びマレーシアの各地で講演を行った。

また、昭和62年2月23日から2月25日まで、ソウル市の大韓民国国立音楽院において、韓国伝統芸能の学修状況を調査し、伝統芸能の保存・継承のあり方についての意見交換を行った。

保存科学部

1. 馬淵久夫化学研究室長は、フランス文化省の招請を受け、エクス・アン・プロヴァンスで開催された歴史的オルガン修復会議における講演と美術館の展示環境調査のため、昭和61年6月20日から7月2日までフランス国を訪れた。
2. 新井英夫生物研究室長は、中華民国国立故宮博物院、台北市立美術館、台南市政府の招請を受け、昭和61年7月23日から8月9日まで、台湾省において文化財の生物劣化とその防除法に関し講演と実演及び生物被害調査を行った。さらに、米国ゲティ保存科学研究所からエジプトのネフェルタリ王妃墓壁画の保存のための総合調査における生物部門の分担を要請され、昭和61年9月8日から13日までカイロ及び

事 業

ルクソールでの第1回の会合と現地調査に参加した。

3. 江本義理保存科学部長は、敦煌文化財保存修復について関係者との協議及び現地討議のため、昭和61年11月9日から11月20日まで中華人民共和国の北京、蘭州、敦煌、西安を訪れた。

修復技術部

1. 西浦忠輝主任研究官は、昭和61年9月5日から10月3日まで、フランス、ベルギー、西ドイツ、チェコスロバキア、イタリア、韓国を訪れ、石造文化財の保存に関する調査を行い、あわせてボローニャ(イタリア)で開かれた第11回 I I C 大会に出席して研究発表を行った。
2. 青木繁夫主任研究官は、昭和61年4月9日から4月25日まで、中国北京において UNESCO 主催で開催された「アジア地区文物保存技術討論会」に参加して日本における出土青銅遺物の保存について研究発表した。その後南京、上海等を訪れ中国における金属文化財の保存について調査した。昭和62年2月5日から7月16日まで、文化庁から ICCROM (ローマ市、国際文化財保存センター)へ研修のために派遣された。

情報資料部

1. 写真資料研究室長鶴田武良は、下記につき中国に出張及び研修旅行を行った。
昭和61年5月9日より5月25日まで、香港中文大学主催中国現代絵画シンポジウム並びに嶺南派研究セミナーに出席。
昭和61年10月18日より11月4日まで、台湾、香港において、近代中国絵画の調査研究を行い、「中国芸術の文人伝統」シンポジウムに出席した。
昭和61年11月9日より11月20日まで、北京、蘭州、敦煌、西安において、敦煌文化財保存修復について関係者との協議及び現地討議を行った。
昭和61年12月18日より昭和62年1月10日まで、北京・中央美術学院において、同学院所蔵民国期展覧会資料の調査を行った。
2. 文献資料研究室長米倉迪夫及び写真資料研究室鈴木廣之研究員は、「林忠正宛書簡の研究」のため、昭和61年9月19日から10月3日まで、フランス、西ドイツ、イギリ

スにおいて関連資料の調査、収集を行った。

(2) 海外研究者の来訪

S. 61. 4. 1 ~ S. 62. 3. 31

月 日	国 名	所 属 ・ 氏 名
4. 21	チエコスロバキア	美術作品修復研究所 ブラハ化学技術研究所 所長 ユリ・ツェリンガー
5. 15	ア メ リ カ	ウェルズリー・カレッジ哲学科教授 I. スタッドラー
5. 27	フ ィ リ ピン	国立歴史研究所保存研究部 M. B. N. マロニラ
6. 17	中 華 民 国	中華民国古蹟考察団 劉 立 民 陳 逸 成 王 月 鏡 鄭 茂 川 李 賢 祥 董 新 詮 黄 峰 雄
8. 12	ス リ ラ ン カ	文化省次官補 A. クナワルデナ
9. 2	フ ラ ン ス	フランス博物館群研究所 M. ラビオラ
9. 4	中 華 人 民 共 和 国	中国文物保護科学研究所視察団 楊 占 廷 唐 德 満 李 義 呉 鐘 琦 王 純 忠 臣 東 梅 范 耀 邦
9. 22	ガ ー ナ	情報省 I. A. シディック

事業

月 日	国 名	所 属 ・ 氏 名
10. 20	ア メ リ カ	マサチューセッツ工科大学 S. ウェンデルケム
10. 21	中 華 人 民 共 和 国	中国歴史博物館 宋 曼 薛 青 平 中国博物館 傳 冰 通 訳 黄 禹 生
11. 29	ボ リ ビ ア	国立考古学協会会長 C. S. ウルクソー
1. 29	ト ル コ	アンカラ大学考古学科主任教授 クトゥル・エムレ
3. 20	中 華 人 民 共 和 国	「中国新疆文物展」代表団 柴 桂 銘 韓 翔 王 経 奎 沙 比 提
1. 23	台 湾 国	東京大学客員研究員 洪 文 雄

(3) 招へい研究員

昭和53年度より招へい研究員の制度が設けられ、本年度は国外6名、国内4名の研究員に研究が委嘱され、下記のように共同研究が行われた。

1) フランク・ホフ(カナダ・トロント大学教授)

共同研究課題 東洋・西洋の仮面劇の比較研究

研究代表者 芸能部長 三隅 治雄

委 嘱 期 間 61年9月26日～10月13日

2) クニユート・アイナール・ラールセン(ノールウェイ工学研究所教授)

共同研究課題 日欧木造古建築の比較研究

研究代表者 所長 伊藤 延男

委 嘱 期 間 62年1月20日～2月8日

3) 郎 紹君(中国芸術研究院美術研究所研究員)

共同研究課題 近代における日中美術交流

研究代表者 情報資料部写真資料研究室長 鶴田 武良

委 嘱 期 間 62年2月26日～3月18日

4) ベル・ミカエル・ラールセン(デンマーク王立図書館修復担当官)

共同研究課題 紙製文化財の修復技術に関する研究

研究代表者 修復技術部第二修復技術研究室長 増田 勝彦

委 嘱 期 間 62年2月6日～2月26日

5) 金 正基(韓国前文化財研究所長)

共同研究課題 日韓両国における建造物、記念物の比較研究

研究代表者 所長 伊藤 延男

委 嘱 期 間 62年3月9日～3月14日

6) 全 明郁(大韓民国文化公報部国立国楽院掌楽課演奏員)

共同研究課題 韓国と日本の伝統芸能保存組織のあり方の比較研究

研究代表者 芸能部長 三隅 治雄

委 嘱 期 間 62年3月23日～3月28日

7) 毛利 伊知郎(三重県立美術館学芸員)

共同研究課題 美術史関係情報の相互利用に関する研究

研究代表者 情報資料部文献資料研究室長 米倉 迪夫

委 嘱 期 間 62年1月12日～1月31日

8) 吉原 忠雄(堺市博物館主任研究官)

共同研究課題 十六羅漢図の研究

研究代表者 美術部長 柳澤 孝

委 嘱 期 間 62年1月26日～2月21日

9) 沢田 正昭(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長)

共同研究課題 非破壊的蛍光X線分析の測定技術の検討

研究代表者 保存科学部長 江本 義理

委 嘱 期 間 62年3月9日～3月14日

国 際

10) 垣内 幸夫(宮城教育大学教育学部助教授)

共同研究課題 安原コレクションに基づく邦楽レコード変遷史の研究

研究代表者 芸能部音楽舞踊研究室長 蒲生 郷昭

委 嘱 期 間 62年3月16日～3月24日

V. 研究施設・設備

1. 蔵 書

美術関係図書

日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたる研究書を中心に、関連図書、各種叢書、辞典類など、和漢書(38,286)、洋書(4,007)、計42,293冊のほか、各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書、美術関係雑誌、紀要類、売立目録、展覧会目録などを所蔵し、所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書7,722冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学・修復技術関係図書

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、又は数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び化学・物理学・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて2,638冊を所蔵している。

本年度における収書数と総計は次表のとおりである。

区 分	美術関係		芸能関係		保存科学・修復技術関係		計
	和漢書	洋書	和漢書	洋書	和漢書	洋書	
61年度	339冊	10冊	17冊	4冊	42冊	16冊	428冊
総数	38,286冊	4,007冊	7,650冊	72冊	1,614冊	1,024冊	52,653冊

2. 資 料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をもおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書蹟、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード・録音テープ・写真(8ミリ・16ミリシネを含む)等による芸能資料を数多くそなえている。レコードには、毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レコード	録 音 テ ー プ		シネフィルム		ビ デ オ テ ー プ
		従来方式	PCM方式	3 mm	16mm	
昭和61年度	35枚	50本	31本	0本	0本	18本
計	7,061 "	2,667 "	113 "	198 "	4 "	185 "

3. 黒田記念室

黒田記念室は、本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であって、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「知・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

4. 閱 覧 室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は、主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。年間の閲覧者数は、約390名である。

Ⅵ. 関係法規

◎文部省組織令抄（昭和59年 政令第227号 改正 昭60政72, 政86, 政126）

第2章 文化庁

第3節 施設等機関

（施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2. 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2. 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3. 国立文化財研究所及びその支所の名称位置及び内部組織は、文部省令で定める。

（研究施設の指定）

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則抄（昭和22年 文部省令第2号 最終改正 昭60文令5, 文令14, 文令28）

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第 116 条の 9 国立文化財研究所の名称及び位置，は次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第 1 款の 2 東京国立文化財研究所

(所 長)

第 117 条 東京国立文化財研究所に，所長を置く。

2. 所長は，所務を掌理する。

(内部組織)

第 118 条 東京国立文化財研究所に，庶務課及び次の五部を置く。

(1) 美 術 部

(2) 芸 能 部

(3) 保存科学部

(4) 修復技術部

(5) 情報資料部

(庶務課の事務)

第 119 条 庶務課においては，次の事務をつかさどる。

(1) 職員の人事に関する事務を処理すること。

(2) 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

(3) 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

(4) 経費及び収入の予算，決算その他会計に関する事務を処理すること。

(5) 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

(6) 庁内の取締りに関すること。

(7) 前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第 120 条 美術部に，第一研究室及び第二研究室を置く。

2. 第一研究室においては，わが国の上代，中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なう。

関係法規

3. 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2. 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
3. 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
4. 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(保存科学の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2. 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
3. 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
4. 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2. 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第四項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
3. 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
4. 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

(情報資料部の二室及び事務)

第 122 条の 3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2. 文献資料研究室においては、第 118 条第 1 号から第 4 号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行なう。
3. 写真資料研究室においては、第 118 条第 1 号から第 4 号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行なう。

東京国立文化財研究所要覧（昭和61年度）

昭和63年1月30日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区上野公園13-27
電話（823）2241（代）
